第２章　維持及び向上すべき歴史的風致

歴史的風致とは，歴史まちづくり法第１条によると，「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と，その活動が行われている歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地が，一体となって形成してきた良好な市街地の環境」とされています。そのため，歴史的風致に設定するためには以下の３つの基準を満たすことが必要となります。

①地域に固有の歴史や伝統を反映した活動が行われていること
②①の活動が，歴史的価値の高い建造物とその周辺で行われていること。
③①の活動と②の建造物が，一体となって良好な市街地を形成していること。

本市では，古来より歴史と文化に育まれ，近世に水戸徳川家の本拠として水戸城が整備されるとともに，城下町として発展しました。

明治以後，本市は県都となり近代化が進み，近世以前のまちなみは少しずつ姿を消しました。さらに，1945（昭和 20）年の空襲で中心市街地の大部分が焼失しましたが，弘道館や偕楽園，水戸城の土塁や堀，八幡宮といった歴史的資源が今も残ります。これらは本市の歴史や文化を感じることができる場であり，多くの観光客や市民が訪れます。

偕楽園には観梅の時期を中心に，多くの人々で賑わいます。また，千波湖は偕楽園の借景とされ，現在は周辺緑地を含めて公園として整備され，多くの人々に親しまれています。

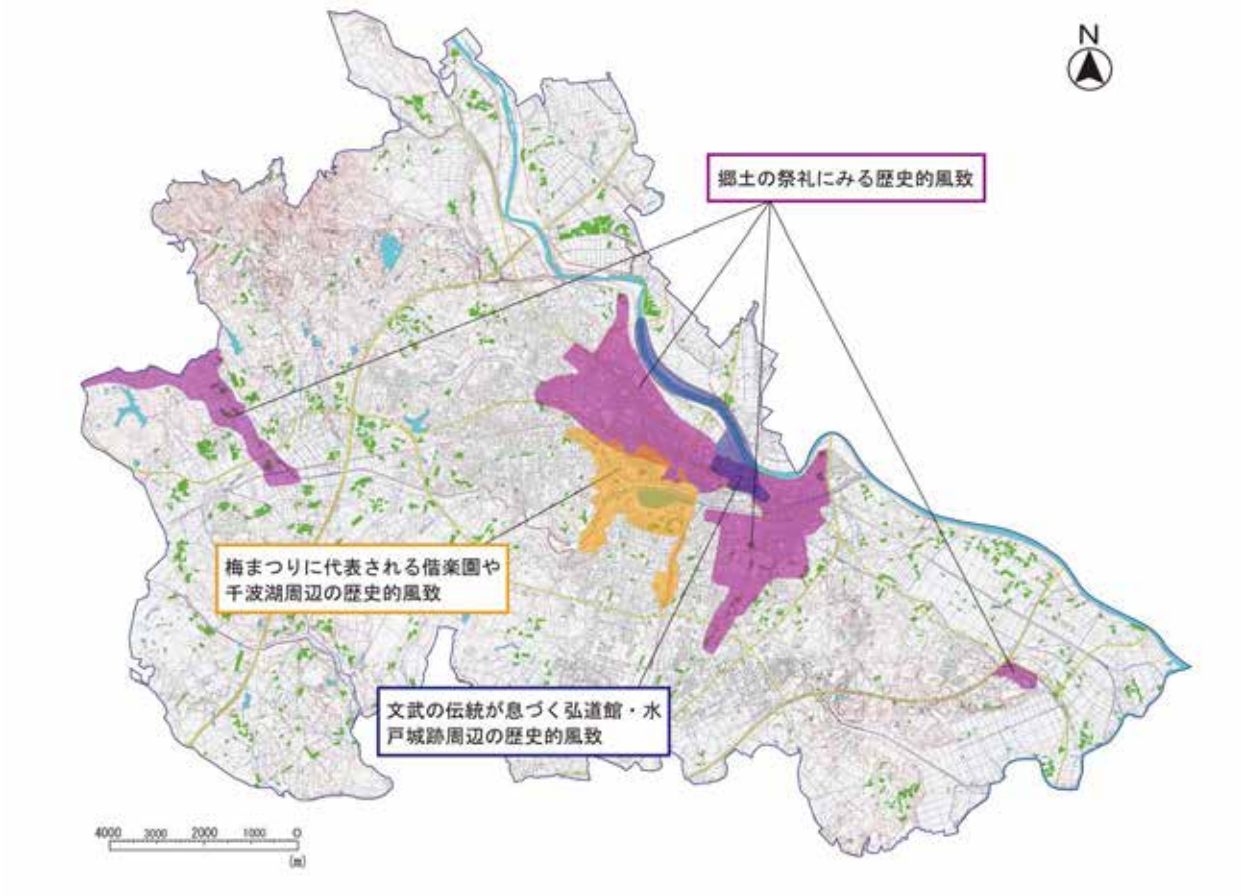
弘道館周辺には多くの学校が建設されて，学びの場として活用されるとともに，弘道館で学ばれた武道が継承されています。

また，本市には多くの祭りや民俗芸能が伝えられています。吉田神社の秋季祭礼，八幡宮の春の例大祭，東照宮の例大祭，水戸黄門まつり，鹿島神社の例大祭，有賀神社のお磯下り，大串稲荷神社の例大祭に奉納される「大串のささらばやし」が代表です。

これらにはいずれも価値ある歴史的建造物があり，歴史的風致とみなすことができます。そのため，本市の歴史的風致を以下の３点に整理することができます。

１　梅まつりに代表される偕楽園や千波湖周辺の歴史的風致
２　文武の伝統が息づく弘道館・水戸城跡周辺の歴史的風致
３　郷土の祭礼にみる歴史的風致

図２－１　本市における歴史的風致の範囲図



1　梅まつりに代表される偕楽園や千波湖周辺の歴史的風致

（1）はじめに

偕楽園から千波湖を望む人々（昭和初期ころ）
（『水戸百年』より）

千波湖は，江戸時代には千波池，千波浦，千波沼とも呼ばれた天然の沼でした。水戸城を守る天然の要害であり，水濠（みずほり）も千波湖の水を活用していました。一方で，城下や人々の生活に欠かせない存在でした。1610（慶長 15）年に関東代官伊奈忠次（いなただつぐ）が千波湖の水を引き，水戸東方の用水路とするための備前堀（びぜんぼり）を開削（かいさく）したことから，千波湖は城下の人々だけでなく，周辺農村の人々にとっても大切な湖となりました。

千波湖と周辺の景観は，水戸の人々に愛され，水戸藩第９代藩主徳川斉昭（なりあき）は千波湖の風景を「水戸八景」の一つに定めました。さらに，江戸時代後期に千波湖に隣接して偕楽園が創設されると，千波湖は偕楽園の借景とみなされました。

偕楽園造成に伴い，斉昭は多くの梅を植樹しました。梅の実が有事の際に非常食として活用できたこともありますが，梅が「好文木（こうぶんぼく）」の異名を持ち，学問を象徴する木として歴代の水戸藩主に好まれていたことが大きな理由でした。水戸の学問の礎（いしずえ）を築いた水戸藩第２代藩主徳川光圀（みつくに）は，自らを「梅里（ばいり）」と号しました。斉昭は，梅と藩政改革の重要な課題である学問隆盛に重ねて，「好文（こうぶん）」の呼び名を好んで使用しました。斉昭が初めて水戸に入国した際には，水戸彰考館（しょうこうかん）の柱に「家の風 今も香りの 尽きぬにそ 文好む木の 盛り知らるる」という和歌を書き，「学問を好む水戸徳川家の家風がいまも受け継がれ，水戸の学問ひいては水戸徳川家が栄える」という意志を示しました。偕楽園が創設されると，斉昭は身分に関係なく同園を開放しました。水戸の人々は梅を愛で，偕楽園と千波湖を含む遠景を楽しみました。

現在の梅まつりの様子

近代以降も，水戸の梅は全国に広く知られるようになり，偕楽園を会場に毎年開催される「水戸の梅まつり（以下「梅まつり」という。）」には多くの人が全国から集い，賑わいを見せるようになりました。

偕楽園やその借景である千波湖に咲き誇る梅は，水戸の象徴です。人々は偕楽園や千波湖周辺の景観をとても大切にし，現在もその景観を守るべく活動しています。

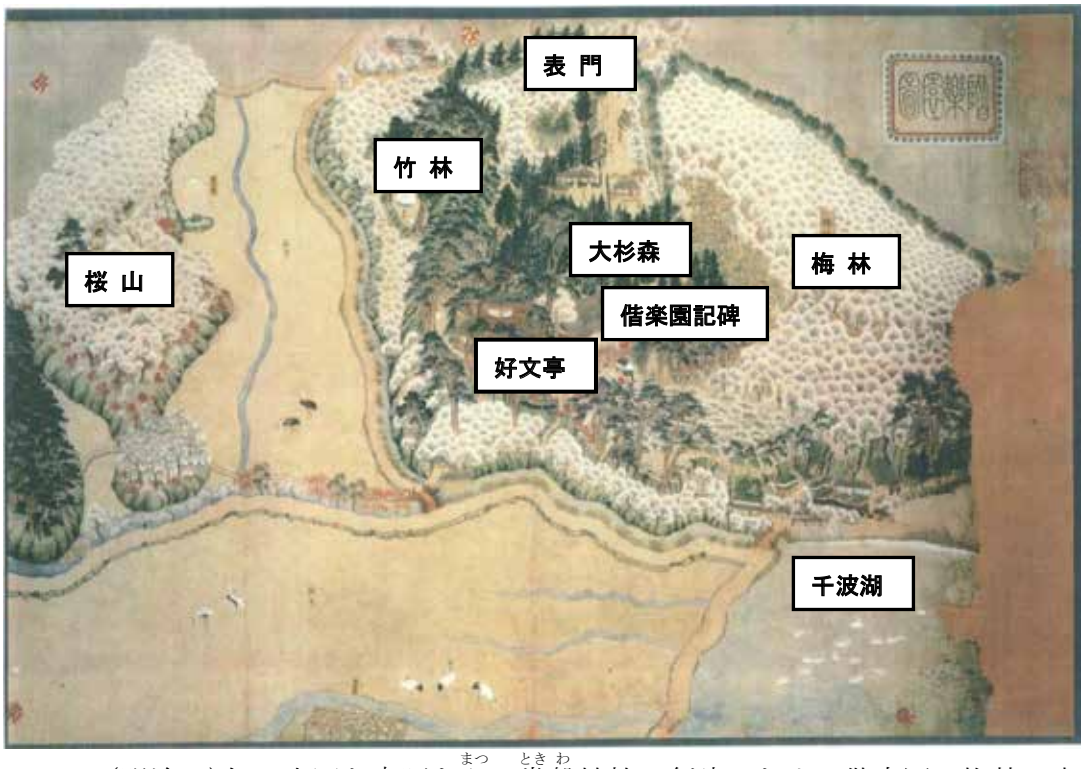
（２）偕楽園の歴史

偕楽園は，日本最大規模の藩校である弘道館の対の施設として，弘道館創設の翌年の 1842（天保 13）年に，徳川斉昭自らの設計により千波湖岸の景勝の地に造成・開園しました。弘道館が文武を学ぶための場であるのに対して，偕楽園は学問や仕事の合間に訪れ，人としての健全育成に必要な心身の修養の場と定められました。約 18ha という広大な敷地を有しました。

偕楽園の梅林

偕楽園の名前の由来は，斉昭が園の創設に関わる趣旨と経緯を述べた「偕楽園記碑」（1839（天保 10）年建立）に「衆とその楽しみを偕にしようとするものである」と記されており，藩主のみならず，家臣や領民とともに修養する意図で設けた稀有な特色を持ちます。藩士やその子弟，さらには領民の教育を目指した斉昭は，園内に学問を象徴する梅林を設け，訪れる人々を楽しませると同時に，学問に励むよう自らの意志を伝えたのです。

参考　江戸時代末期の偕楽園図（大洗町幕末と明治の博物館寄託）



1873（明治６）年，光圀と斉昭を祀る常磐神社の創建のため，偕楽園は梅林の東側約３．６ha（＝約 36,300 ㎡）を割譲し，残りの敷地約 14ha が「常磐公園」という名

称となり，公園として自由に入園が可能となって，市民に一層利用されるようになりました(1931（昭和６）年に「偕楽園公園」と改称。ただし文化財の指定名は現在も「常磐公園」)。常磐神社周辺には旅館や土産物屋が建ち，偕楽園とともに，多くの人々が集まるようになります。

明治初年の常磐神社下の大鳥居周辺。すでに多くの店がならぶ。のちに偕楽園臨時駅が設けられた。(『常磐公園攬勝図誌』)

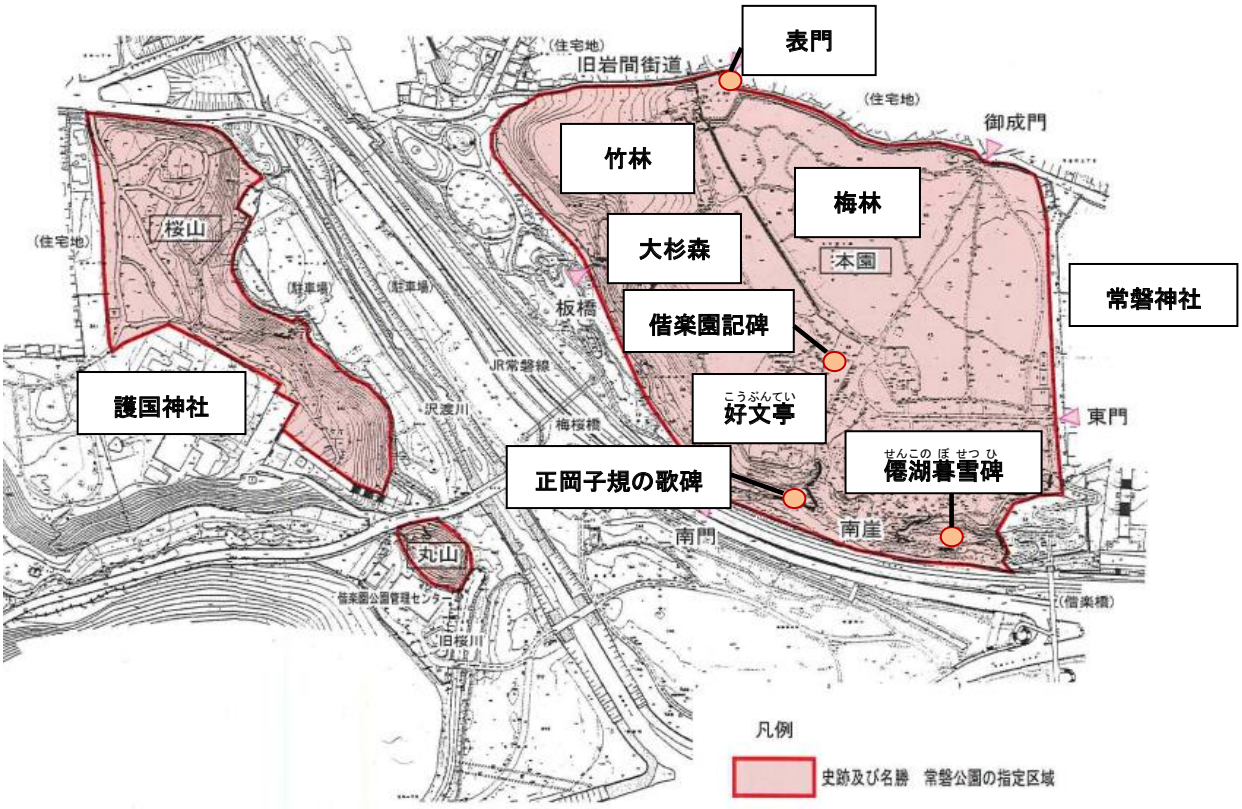
1889（明治 22)年の水戸への鉄道開通をきっかけに，県外からも多くの人々が来園するようになりました。詩人正岡子規(まさおかしき)が同年に偕楽園を訪れており,『水戸紀行(みときこう)』(『子規全集第８巻（少年時代創作篇)』大正 14 年，アルス刊他）にて，「この楼の景色は山あり水あり奥如(おくにょ)と曠如(こうじょ)を兼ねて天然の絶景と人造の庭園と打ち続き常磐木，花咲く木のうちまじりて何一つ欠けたるものなし。余は未だ此のごとき婉麗幽遠(えんれいゆうえん)なる公園をみたることあらず（この楼（好文亭）から眺める偕楽園の景色は山水あり，調和がとれた天然の絶景と人工の庭園が続き，常緑樹林と桜や梅の木が植えられ，公園として何一つ欠点がない。私はこのような世俗から隔絶した美しい公園をみたことがない。)」と絶賛しています。この後詠んだ「崖急(がいきゅう)に梅ことごとく斜めなり」の句碑は，櫟門(くぬぎもん)から坂を下りたところの崖に沿って立つ老梅の傍(かたわ)らに設置されています。

1904（明治 37）年から使用された国定教科書の『尋常小学読本七』では，東京の上野公園，浅草公園，日比谷公園，水戸の公園（偕楽園)，金沢の公園（兼六園(けんろくえん))，岡山の公園（岡山後楽園(おかやまこうらくえん)）が「名高し」と記されています。さらに，1910（明治 43）年に文部省から発行された『高等小学読本』巻一では，「(前略）我ガ国ニテ風致ノ美ヲ以テ世ニ聞エタルハ、水戸ノ偕楽園、金沢ノ兼六園、岡山ノ後楽園ニシテ、之(これ)ヲ日本ノ三公園ト称(しょう)ス。」とあり，この頃には兼六園（金沢)，岡山後楽園（岡山）とともに，日本三公園の一つと称されていたことがわかります。近年ではこれら庭園を「三名園」と呼ぶことが多くなっています。

偕楽園は，「偕楽園記碑」に説く，徳川斉昭の陰陽思想(いんようしそう)（陰と陽といった相反するものの調和によって万物は健全育成する）に基づき，竹林や杉林を「陰」，梅林を「陽」とする庭園構成や，園内から望む千波湖と緑地帯の優れた借景美などの特徴から，現在も名園の一つに数えられ，多くの人々に愛されています。全国に梅林の名所は数多くありますが，偕楽園は，国指定の記念物（名勝）に指定された約 13.8ha の約２分の１に,風格ある古木をはじめとした約 100 品種 3,000 本の梅があり,早咲き(探梅)，中咲き（賞梅)，遅咲き（送梅）とその開花期が正月前から彼岸すぎまで長い期間に

わたって観梅できます。梅独特の馥郁（ふくいく）たる香気と白梅の清らかさ，紅梅の艶（つや）やかな美しさ，そして枝ぶりが醸（かも）し出す格調の高さを楽しむことができます。

図２－２　現在の偕楽園とその周辺



「偕楽園（史跡及び名勝常磐公園）保存活用計画」（茨城県，2007 年）より加筆

（３）建造物等

ア　偕楽園（常磐公園，国指定の史跡・名勝）

（ア）好文亭（こうぶんてい）

好文亭は，庭園内に建つ水戸藩第９代藩主徳川斉昭が自ら設計した木造二層三階建ての建物です。「好文亭」の名前は，好文木（こうぶんぼく）という梅の異名からとったもので，学問に励んでいるときは梅の花が咲き，学問を怠るときは散りしおれてしまったという中国の故事に由来しています。弘道館（こうどうかん）で学ぶ書生や，領民の休養の場として建築されました。園内の高台に建ち南に面して見晴らしのよい大広間が

好文亭

２室，さらに借景を眺望できる３階の座敷を備え，料理の間や当時では珍しい運搬昇降設備を備えています。建物全体に数奇屋風（茶室）の意匠が見られます。

軒を高くして室内から外の眺望が眺めやすいように工夫され，外部との間仕切りはすべて障子にするなど開放感のある外観です。屋根はこけら葺の寄棟造で，四方から見ても表・裏の区別がなく，庭園や遠方からの建物の眺望も意識されています。さらに，1870（明治３）年，徳川斉昭正室（文明夫人）の居室として，水戸城の中御殿の一部が，好文亭と太鼓廊下でつながる形で移築・増築され，奥御殿と呼ばれました。

1945（昭和 20）年に空襲により好文亭は奥御殿とともに焼失しましたが，1958（昭和 33）年に復元されました。しかし，奥御殿は 1969（昭和 44）年に落雷で再度焼失しました。この時，好文亭は復元の際に空襲を教訓として防火扉を整え，初動の消火活動が功を奏したことから，延焼を免れました（奥御殿も 1973（昭和 48）年に復元）。

（イ）偕楽園記碑

偕楽園記碑は，斉昭の自筆による「偕楽園記」が記された，高さ 2.5m，横 2.4 mの石碑です。1842（天保 13）年の偕楽園開園に先立ち，1839（天保 10）年に建てられました。

偕楽園記碑

石碑には「偕楽園記」の４文字と偕楽園設立の精神が六百余字にわたって記され，その周囲に梅の絵柄が刻まれています。記には，偕楽園記の趣旨を表す「一張一弛（弓は張ったりゆるめたりしなければたわんでしまう，緊張と休養が必要である。）」が記されるとともに，「梅樹数千株を芸ゑ，以て魁春の地を表す」とあり，当初から斉昭が偕楽園に梅林を作ることを計画していたことがうかがえます。

（ウ）表門

園内の東西のほぼ中央に位置し，北西の園外道路から奥に進んだ位置に東面して建ちます。松を燃やした煤で作る顔料の松煙を塗っているため，「黒門」ともいわれています。

園の正門として，板扉と袖塀（門の隣につく塀）がついた格式のある門で，正客やその他の出入りに使用されました。

大きい柱を用いた重厚な萱屋根を用い，出入口の両開きの扉には当初からの材料が使用されています。内側に閂の戸締り装置，唄金物という表門の釘を隠すための飾りが装飾されています。

表門

園内へ入る門は他にも「御成門」「東門」がありますが，いずれも明治以降に建てられました。また，園内の「一ノ木戸門」「中ノ門」等と比べて，表門は最大の規模を誇り，1945（昭和 20)年の空襲を逃れた創建当初の 1842（天保 13)年から残る貴重な建造物です（『偕楽園（史跡及び名勝常磐公園）保存活用計画報告書』茨城県，2007 年)。

（エ）僊湖暮雪碑

僊湖暮雪碑は，斉昭が選定した水戸藩内の景勝の地「水戸八景」の一つで，千波湖を一望できる，偕楽園南側の斜面上に設置されています。僊湖とは偕楽園の借景である千波湖のことです。

僊湖暮雪碑

斉昭は，中国古代の北宋時代より風光明媚な地として知られた瀟湘八景を参考として，1833（天保４）年に水戸藩内で水戸八景を選びました。翌 1834（天保５)年に，偕楽園内に自然石を用いた石碑が建てられ，斉昭自らが筆書した銘が刻まれました（『偕楽園（史跡及び名勝常磐公園）保存活用計画報告書』，茨城県，2007 年)。

イ　笠原水源（浴徳泉記碑）

水戸の城下町は用水の便が悪く，特に下町住民は飲料水に不自由であったため，水戸藩第２代藩主徳川光圀は，1662（寛文２)年に町奉行望月恒隆に水道設置を命じました。調査に当たった平賀保秀は，笠原山（現水戸市笠原町）を水源地に選び，工事は永田勘衛門が担当して笠原から逆川に沿って，藤柄町まで

浴徳泉記碑

岩樋を用いた地下の水路を作り，備前堀を銅樋で渡して，全長約 10km の水道が翌年完成しました。笠原水道は現在茨城県指定記念物（史跡）に指定されています。

水源地に石碑（浴徳泉記碑）があります。享和年間（1801 年～1804 年）に水道の大修理が行われたことを機に，町年寄の加藤又右衛門らの発案で設置されることになり，1826（文政９）年に建立されました。石碑の題字「浴徳泉」は水戸藩第８代藩主徳川斉脩の詩句の「今猶浴先君徳（今なお，先君（＝光圀ほか歴代藩主）の徳に浴す」から選ばれ，斉脩の弟で，第９代藩主徳川斉昭が隷書体で詩を記しています。文章の作成（撰文）は彰考館総裁の藤田幽谷が行いました。

ウ　茨城県護国神社

茨城県護国神社は，幕末から明治維新にかけて亡くなった水戸藩関係者などを祀るため，1878（明治 11）年に常磐神社の境内地に「鎮霊社」として創祀されたのが始まりです。その後，全県下の戦没者を祀る神社となりました。1939（昭和 14）年４月，国の方針により各県下に護国神社が創建されることとなり，1941（昭和 16）年，常磐神社から現在の桜山に遷されて，「茨城県護国神社」と改称されました。

茨城県護国神社

終戦後の 1947（昭和 22）年に「桜山神社」と改称しましたが，1954（昭和 29）年 10 月に「茨城県護国神社」と復称しました。

本殿は創建当時のもので，柱が三本あり，屋根が優美な曲線をもつ二間社流造となっています。京都宇治の平等院鳳凰堂を模したといわれており，他の護国神社でも多く取り入れられている様式です。(『茨城県近代和風建築総合調査報告書』茨城県教育委員会，2017 年)。

エ　常磐神社

常磐神社は 1871（明治４）年，旧水戸藩士が水戸藩第２代藩主徳川光圀，第９代藩主徳川斉昭の像を偕楽園好文亭内の祠堂に祀ったことが始まりです。

1873（明治６）年，祠堂は常磐神社と改称し，翌 1874（明治７）年に現在地に移転しました。

祭神は光圀と斉昭で，常磐神社の創設には新

常磐神社拝殿

政府の支援が大きく，「名君」と謳われた光圀・斉昭を顕彰することで，幕末以来の旧水戸藩士内の党争を終結させ，水戸の人々を明治新政府に従わせることにあったといわれています。

社殿は 1945（昭和 20）年に空襲によって焼失しましたが，1958（昭和 33）年に再建されました。現在は，本殿，拝殿，幣殿ともに神明造の銅板葺です。また，再建前年の 1957（昭和 32）年には，境内に光圀や斉昭ゆかりの資料を展示する「義烈館（ぎれつかん）」が建てられました。

さらに，境内には，1903（明治 36）年に第 15 代将軍徳川慶喜が揮毫（きごう）し建てた石碑「浪華梅碑（なにわのうめひ）」があります。碑には慶喜の父で，水戸藩第９代藩主徳川斉昭の和歌「家の風　今も香りの　尽きぬにそ　文好む木の　盛り知らるる」が刻まれています。これは斉昭が初めて水戸に入国した時に水戸彰考館の柱に書き付けた歌で，梅の木（文好む木）に自らの学問改革の志を投影したものとして知られます。碑の裏面には大日本史の完成に尽力した，学者栗田寛（くりたひろし）の撰による「浪華梅記」が刻まれています。また，碑の側にある梅は，水戸藩第２代藩主徳川光圀が難波（現在の大阪市）から取り寄せ，植えた木の子孫と言われています。

浪華梅碑

（４）人々の活動

ア　梅まつりと偕楽園

（ア）梅まつりの変遷

1893（明治 26)年２月，上野から小山・水戸線経由で観梅列車の運行が開始され，翌 1894（明治 27）年には観梅にあわせて来訪者を歓迎する催しが実施されました。さらに，1896（明治 29）年に常磐線（じょうばんせん）が開通すると，民間から東京からの観梅客の誘致が積極的に始まり，1897（明治 30）年には「第１回梅まつり」が開始されました。1899（明治 32）年には，市内の旅行業者が鉄道会社に交渉して，上野駅から水戸駅まで臨時列車の運行に成功し，地元では民間が主体となって，福引や花火打ち上げなど盛大な歓迎行事が行われ，これ以降「水戸の観梅」は東京方面で広く知られるようになりました。1902（明治 35）年には偕楽園の芝生の仮設舞台で大工町芸妓の磯踊（いそおど）りが演じられるようになり，東京や仙台から多くの団体客が訪れ市民の大歓迎を受けたといいます。

1935（昭和 10）年の観梅風景

（『水戸百年』より）

1910（明治 43）年，当時の水戸市長が会長となり「水戸市観梅歓迎委員会」が組織され，官民挙げて観梅客の誘致に乗り出すようになりました。こうした官民の協力体制により徐々に全国から観梅客が水戸を訪れるようになりました。さらに，1925（大正 14）年２月には，常磐神社下に偕楽園臨時駅が設けられ，梅まつりの時期には，観光客が駅から下車後に短時間で偕楽園に入園できるようになり，交通の利便性が大幅に向上しました。観梅列車の到着時には，市役所職員等が観梅客を出迎えたり，水戸駅に梅の老木を飾ったりするなど大いに盛り上がりを見せました。

昭和に入っても賑やかに催されていた梅まつりでしたが，戦時中に一度中断されました。梅林の一部が燃料として伐採され，好文亭といった主要な建造物も 1945（昭和 20）年の空襲で焼失しました。

戦後，1947（昭和 22）年に梅まつりが復活し，多くの観梅客が水戸を訪れるようになりました。水戸観光協会（現水戸観光コンベンション協会）が事務局となり，官民協働で梅まつりを盛り上げました。また，地元の新聞社などの呼びかけで「郷土梅樹愛護会」が結成され，募金やボランティアなどで梅林の再建・整備が進められることとなるなど，梅は水戸の人々にとって，大切なアイデンティティとなっていました。

1951（昭和 26）年の記録によれば，偕楽園内に野外舞台が設置され，郷土芸能，

芸者の手踊り，神楽などが上演され，偕楽園，常磐神社境内などでは野点茶会，梅花華道展，俳句・川柳大会，写真大会などが開催されました。好文亭等の再建工事も進められ，1958（昭和 33）年に完成しました。さらに，偕楽園ほか，千波湖（マラソン大会）や桜山の護国神社（雛祭り）など，周辺でも関連行事が開催され，多くの人々が訪れました。

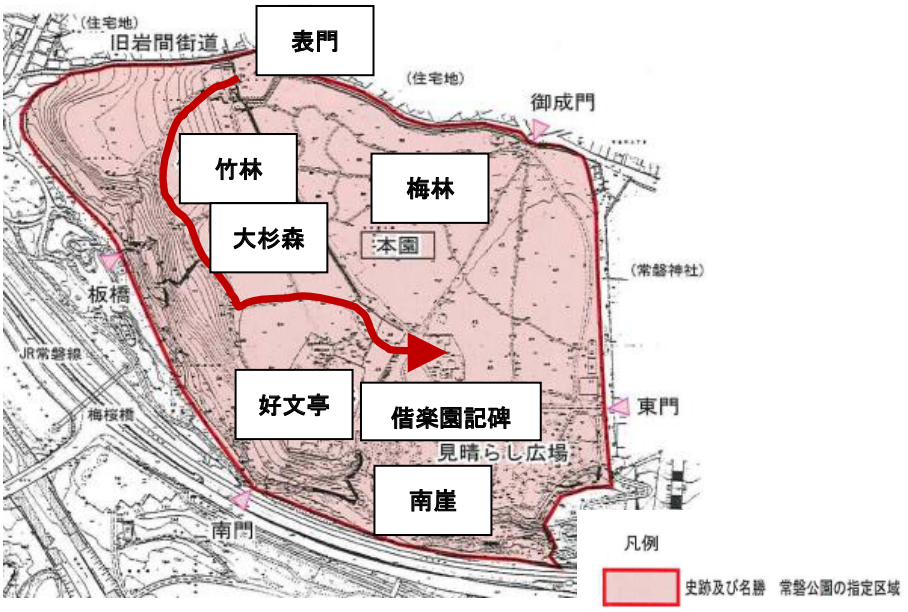
1963（昭和 38)年には，それまでの芸者等に代わって一般公募による「梅むすめ」が登場し，観梅客のもてなし等に活躍して好評を得ました。「梅むすめ」は 2001（平成 13）年に「水戸の梅大使」と名称を変更し，現在も活躍しています。

2011（平成 23）年３月 11 日，東北沖を震源地に発生した東日本大震災では，水戸市内も甚大な被害を受け，偕楽園も被災しました。地震発生当時は梅まつりが開催中でしたが，中止となりました。しかし，翌 2012（平成 24）年に早くも梅まつりが再開され，変わらず水戸の人々にとって大切な行事となっています。

（イ）現在の梅まつりと偕楽園

現在の梅まつりは，梅の開花にあわせ２月中下旬から３月 31 日の期間に実施されています。今は東門や御成門など，明治以降に建てられた門がありますが，本来は表門から園内に入り，竹林や大杉森のなかを進みます。その後，好文亭や偕楽園記碑を見ながら眼前に広がる梅林や，斜面にある僊湖暮雪碑を眼下に望みながら，南崖の借景である千波湖の眺めを楽しむのが順路となっています。そして枝ぶりが醸し出す格調の高さを楽しむことができます。

図２－３　表門から進む順路



「偕楽園（史跡及び名勝常磐公園）保存活用計画」（茨城県，2007 年）より加筆

現在でも，この順番で園内を散策する人は多く，江戸時代から続く観梅の伝統は受け継がれています。

梅まつりの野点茶会

また，週末を中心に，市民団体により，茶道，邦楽，俳句など各種の伝統芸術が行われます。期間中には，水戸藩の武家の茶道として江戸時代より受け継がれてきた石州流（せきしゅうりゅう）をはじめとした市内の各流派による野点茶会が開催され，目玉行事のひとつとなっています。その他，開園当時からの梅を愛で詩歌を作る伝統を踏まえて，終戦直後より市内の文学団体の主催で観梅俳句大会が継続して実施されるなど，偕楽園の梅林の由来やその精神を踏まえつつ，市民の主体的・積極的な活動が行われています。

偕楽園の近隣施設では，梅まつりの関連行事が行われます。常磐神社では，社殿や浪華梅碑が建ち並ぶ広場が会場となって，謡（うたい）と仕舞，琴･雅楽などの演奏や，全国梅酒まつりが開催されます。また，茨城県護国神社では雛人形展が行われます。

常磐神社での演舞

護国神社の雛人形展

今日，梅まつりは来訪者のみならず市民が心待ちする年中行事となっています。咲き誇る梅花の周辺で数多の人々が集い，楽しむさまは，「衆と偕に楽しむ」という藩主斉昭の設置の趣旨にかなう，他の大名庭園にはない偕楽園ならではの情景です。

偕楽園やその周辺では，「水戸の桜まつり」，「水戸のつつじまつり」，「水戸の萩まつり」の会場にもなっており，四季折々の花を楽しむことができるため，梅まつりだけでなく，年間を通して人々が集まる場所となっています。

表２－１　梅まつりの際に偕楽園で活動する主な団体

	名前	活動開始年	活動内容
1	ひたち野会	1947（昭和 22）年	毎年「観梅俳句大会」を開催
2	茨城県カメラ商組合	1948（昭和 23）年	毎年「大撮影会と写真コンテスト」を開催
3	社会福祉法人愛友園	1953（昭和 28）年	職員と施設利用者による，月 1 回本園のゴミ拾い及び巡視活動
4	わらじ愛好会	1976（昭和 51）年	時代劇での水戸黄門の衣装に扮して，観光ボランティア活動を行う。
5	常陸和紙人形会	1978（昭和 53）年	和紙で人形を作成。毎年「水戸のひな流し」を開催
6	水戸黄門漫遊一座	1996（平成８）年	時代劇での水戸黄門の衣装に扮して，観光ボランティア活動を行う。
7	歴史アドバイザー水戸	1997（平成９）年	偕楽園及び弘道館公園における観光案内活動
8	茨城県茶道連合会	2005（平成 17）年	県内の茶道流派により，お茶会を開催
9	偕楽園公園を愛する市民の会	2006（平成 18）年	偕楽園公園の歴史と自然を学び，風致と梅を守り後代に伝えると共に，新しい魅力を創出することを目的とする。講座やワークショップ，自然観察等

イ　千波湖と周辺緑地の景観保全

（ア）景観の変遷

千波湖は水戸城を守る天然の要害であった一方，水戸の人々にとってその景観が愛されました。

1651（慶安４）年，千波湖の中に堤が築かれ，城下の上町と下町をつなぐ新道が作られました。水戸藩第２代藩主徳川光圀は，柳を植林して，1690（元禄３）年に新道を「柳堤（やなぎつつみ）」と命名しました。宝暦年間（1751 年～1764 年）に柳堤に楓が植林され，一層風致が高まったと言われます。

千波湖の景観の美しさは，中国の西湖になぞらえられ，武士，領民に関係なく愛されました。安積澹泊（あさかたんぱく）や藤田幽谷（ふじたゆうこく）といった水戸を代表する学者も，千波湖を題材とする詩を残しました。

警備上の問題で夜間は禁止されましたが，江戸時代後期には，昼間には人々は城下の船宿（ふなやど）から船を漕ぎ出し，湖面に舟を浮かべて遊覧しました（『水戸市史中巻（一）』水戸市役所，1968 年）。さらに，水戸藩第９代藩主徳川斉昭は，水戸領内に景観の美しい八か所（「水戸八景」）を定め，千波湖をその一つとしました。斉昭が偕楽園を創設すると，千波湖は偕楽園の借景とみなされました。

千波湖周辺の地区も，人々に親しまれました。徳川光圀は，笠原の地（現水戸市笠原町）を水源とする水道（笠原水道）を建造し，あわせて水源近くに茶屋「漱石所（そうせきじょ）」を設け，曲水の宴を設けて，領民を招きました。領民もたびたび水源を訪れ，人々の憩いの場となりました（『茨城常磐公園攬勝図誌（いばらきときわこうえんらんしょうずし）』松平俊雄，1885 年）。桜川周辺は光圀が多くの桜を植えたと伝わり，桜の名所として多くの人々に親しまれました。

領民が笠原水源を訪ねる

（『常磐公園攬勝図誌』）

明治以降，1921（大正 10）年に始まった干拓事業では，湖が大幅に埋め立てられましたが，偕楽園周辺は残され，また那珂川から千波湖に揚水することで，千波湖の水質や景観が大きく向上しました（『水戸市史（下巻二）』水戸市役所，1995 年）。

1948（昭和 23）年に偕楽園が偕楽園公園になると，偕楽園周辺を「拡張部」と設定し，また，1965（昭和 40）年に千波湖周辺が千波公園となって，県と市でそれぞれ整備が進められています。

（イ）景観保全の活動

江戸時代，水戸の人々は武士・領民に関係なく，千波湖を大切に守りました。武士

や城下町に住む町人は，毎年順番で湖岸の清掃を行い，湖の蓮払い，藻屑払いを行っていました。1630（寛永７）年には，８月２日から５日までにのべ 733 人が藻屑払いに従事しました（『水戸市史中巻（一）』）。

1871（明治４）年に水戸藩がなくなると，備前堀を利用する周辺農村が中心となって，1891（明治 24）年に千波湖水利組合（以下「水利組合」）を結成し，湖の管理を行いました。しかし，水戸市の中心市街地の開発や交通の障害，泥土の水底への堆積，加えて水戸台地の下に位置する下市の洪水の要因などを指摘されるようになったことから，茨城県が千波湖の改良事業を行う計画を立てました。この時，県は水戸市民の意見を受け入れながら整備を進めました（『水戸市史下巻（一）』）。

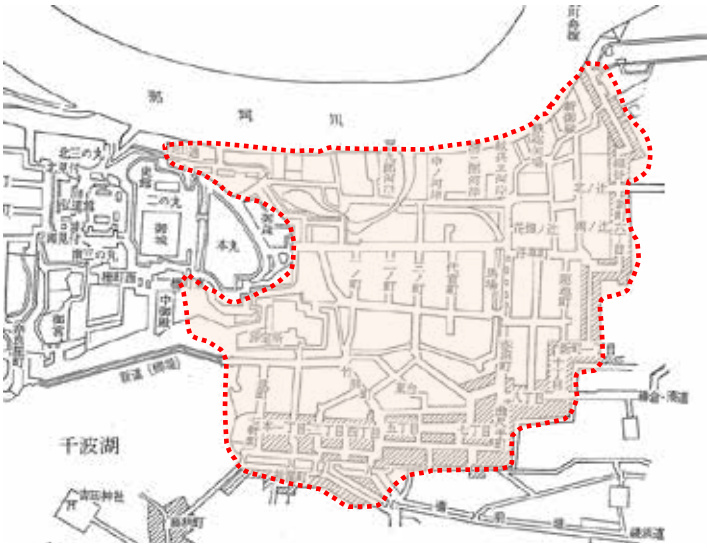


図２－４　下市（下町）の範囲

水戸城の杉山門や柵町坂下門より東側

戦後，千波湖周辺は公園として整備されました。また，1951（昭和 26）年，水利組合は千波湖土地改良区に改組され，現在は用水整備事業に取り組んでいます。

さらに，千波湖や千波湖周辺の地元（千波地区）の人々のほか，多くのボランティア団体が組織されて，千波湖や周辺緑地の清掃作業などを行っています。近年は清掃だけでなく，鮭の放流や螢の再生，桜の植樹といった，千波湖や周辺緑地の自然環境を次世代へ残すための取り組みが活発になっています（表２－２参照）。

このような多くの人々の努力で，千波湖や周辺緑地の景観は保たれています。

偕楽園周辺を清掃する様子

（1988 年（昭和 63）年ころ）（『水戸百年』より）

ボランティア活動の様子

表２－２　千波湖周辺で景観保全活動を行う主な団体

	名前	活動開始年	活動内容
1	デゴイチを守る会	1971（昭和 46）年	千波湖畔に展示されているデゴイチ（D 51 型蒸気機関車）を，永く後世に残すことを目的に設立。清掃活動など
2	街を花と緑でいっぱいにする会	1991（平成3）年	各種講習会の開催，花の種の配付，交番のプランター維持管理など
3	故郷千波を創る協議会	1993（平成5）年	千波地区の人々で組織され，千波湖や逆川緑地で活動を行う。清掃活動も行う。
4	千波湖周辺の公園と自然を愛する市民の会	1994（平成6）年	花壇の植栽や清掃など
5	逆川を愛する会	2000（平成 12）年	逆川緑地を中心に，清掃活動，鮭の稚魚の放流，螢の再生活動など
6	偕楽園散歩会	2005（平成 17）年	偕楽園を中心に，清掃活動など
7	偕楽園四季の会	2005（平成 17）年	偕楽園の PR（HP「速報偕楽園」など）及び資料収集や清掃活動
8	千波湖水質浄化推進協会	2010（平成 22）年	2010（平成 22）年 2 月に開催された「千波湖浄化シンポジウム」を契機に，市民主体により設立された団体。市民と行政との協働で，千波湖の水質浄化を目指す。
9	水戸桜川千本桜プロジェクト	2012（平成 24）年	水戸桜川沿いに徳川光圀由来のヤマザクラ中心の景観を復元し，守り育てるために設立。未整備地を含めた偕楽園公園と桜川中上流部の公園整備の促進
10	水戸藩にまつわる薬草園の会	2015（平成 27）年	主に西の谷を中心に活動。公園内に光圀にまつわる薬草を植生する活動
11	ホタルネットワーク MITO	2015（平成 27）年	英宏小・中学校，逆川こどもクラブ・常磐大学が中心となって設立。桜川緑地・逆川緑地・沢渡川緑地・西の谷などの景観を整備し，螢の再生活動を行う。

現在，貸しボートで湖の上から周辺の景色を楽しむ人々，また，湖周辺の遊歩道で，偕楽園や湖周辺に咲く四季折々の花や，湖に住む白鳥や黒鳥たちが湖畔で休む様子を眺めながらウォーキングやジョギングなどを楽しむ人々の姿を多く見ることができます。周辺地区も偕楽園や千波湖と一体的に整備され，浴徳泉記碑に隣接する笠原水

源の竜頭共用栓（明治時代に作られていたものを，1989（平成元）年に復元したもの）から出ている水は，水源湧水を活用した水道水で，人々が利用しています。

さらに，近年では，花火大会など，様々なイベントの会場として活用されています。形を変えながらも，千波湖周辺は江戸時代より，人々の憩いの場として活用され，多くの人々の活動によって景観が守られています。

図２－５　偕楽園と千波湖周辺

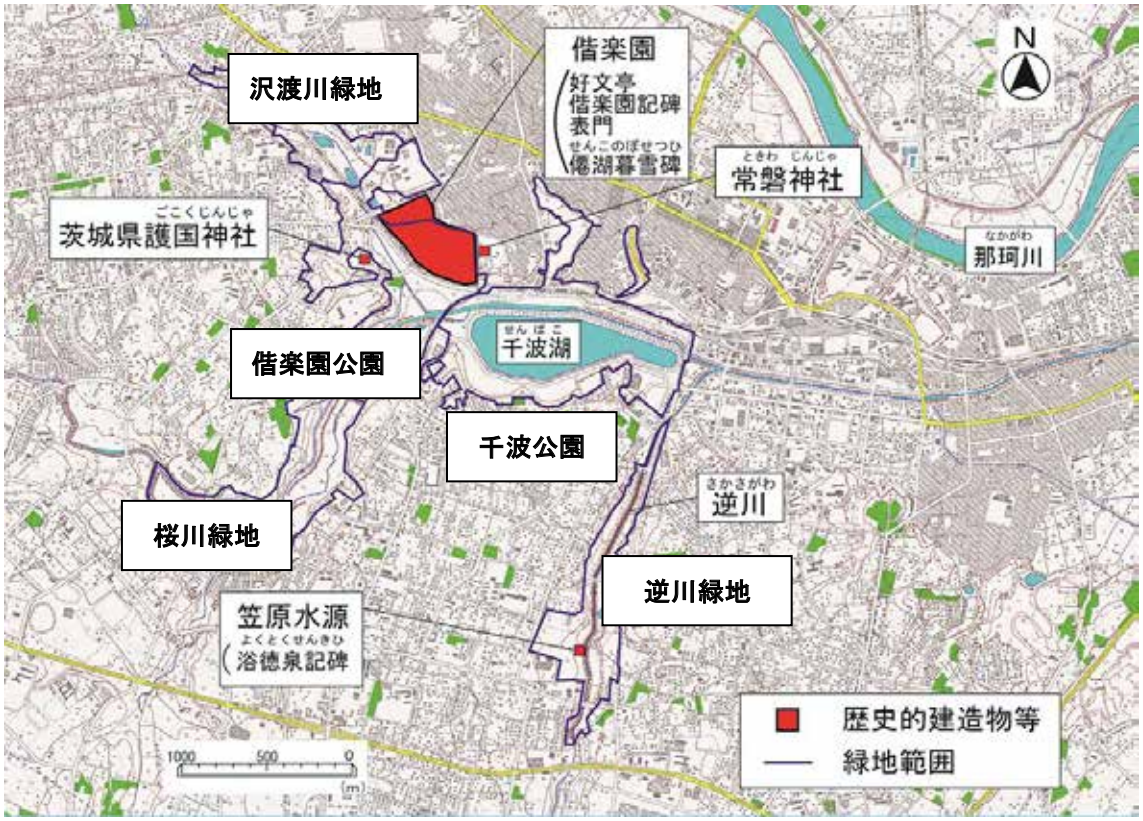
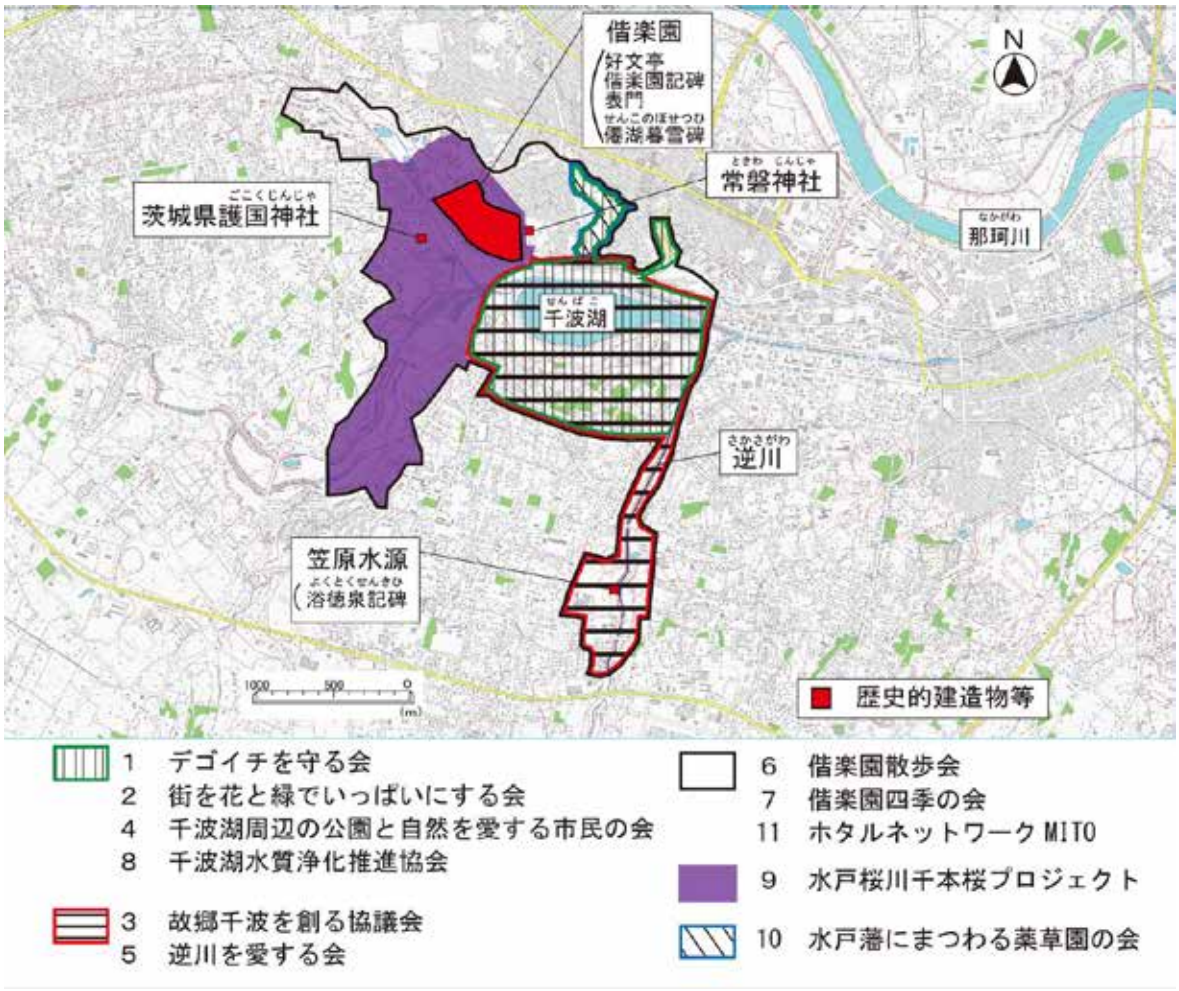


図２－６　千波湖周辺で景観保全活動を行う主な団体の活動範囲



５　まとめ

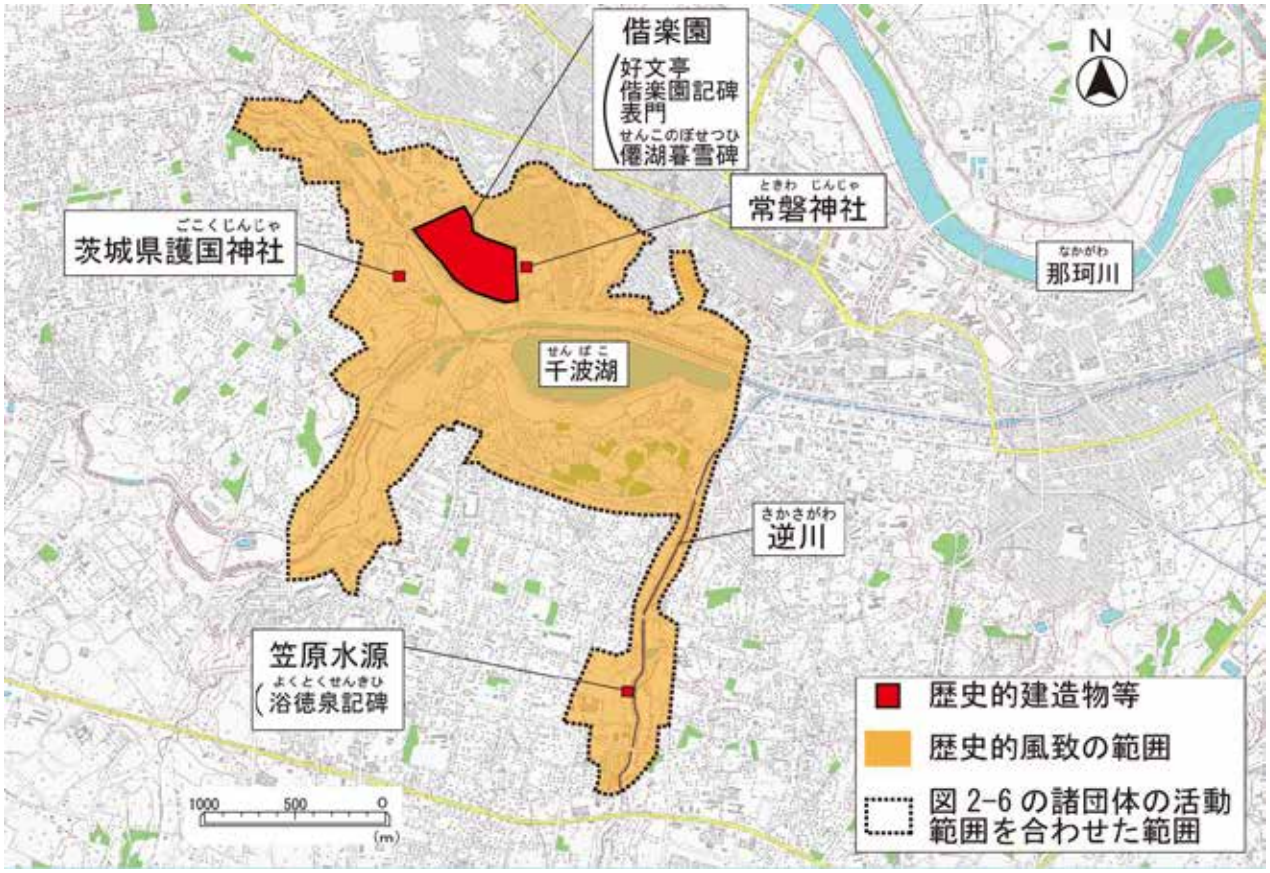
江戸時代より，千波湖は水戸城下町やその周辺の村々には欠かせない存在でした。さらに湖周辺は風光明媚な場所として，武士・領民問わず，水戸の人々に慕われていました。

偕楽園が創設され，多くの梅が植林されると，その美しさは磨きを増し，人々は梅林に親しみ，偕楽園からの千波湖やその周辺の眺めを楽しみました。その伝統は，時代とともに形を変えながらも，現在も市民によって脈々と受け継がれています。

また，江戸時代より，武士・領民問わず，人々は千波湖を管理し，掃除をしながら千波湖の景観を守ってきました。現在は偕楽園公園・千波公園のほか，周辺は緑地として整備されていますが，市民のボランティア活動によって景観が守られています。

偕楽園や千波湖周辺は，多くの人々によって守られてきた，本市を代表する歴史的風致といえます。

図２－７　歴史的風致の範囲



２　文武の伝統が息づく弘道館・水戸城跡周辺の歴史的風致

（１）はじめに

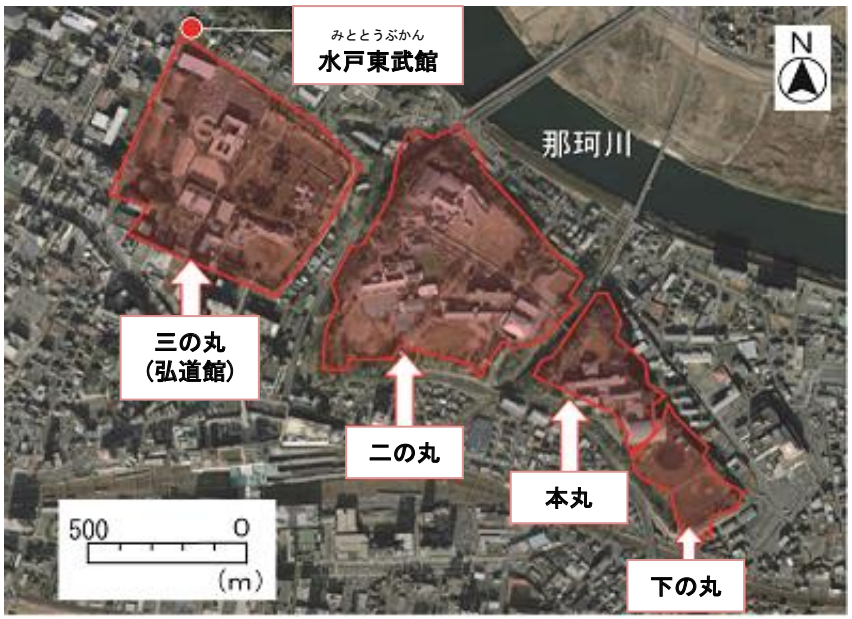
水戸城の歴史は古く，創設は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけてと言われています。築城以降，数多（あまた）の城主によって城とその城下の整備が行われ，水戸地方の政治，経済の中心地として栄えました。水戸藩第２代藩主徳川光圀は，歴史書の編纂のために水戸城二の丸に水戸彰考館（みとしょうこうかん）を創設しました。彰考館には多くの学者が集い，水戸の学問の興隆の礎となりました。1841（天保 12）年には，第９代藩主徳川斉昭（なりあき）が三の丸に藩校弘道館（こうどうかん）を創設して，水戸藩の文武がますます盛んになりました。

1945（昭和 20）年の空襲によって，同地区も甚大な被害を受け，水戸城のシンボルともいえる三階櫓（さんかいやぐら）も焼失しました。それでも水戸城跡には藩校弘道館ほか，今も江戸時代の土塁，堀などが残り，城郭や藩校としての風情が残されています。

現在，周辺には小学校，中学校，高等学校など多くの教育機関が立地し，文教地区となっていて，学問の府として多くの藩士の子弟が集った往時のたたずまいをしのぶことができます。また，弘道館建学の精神を記した「弘道館記」は，近傍の小・中学校の授業にも取り入れられています。さらに，至善堂（しぜんどう）においては，親子を対象にした論語塾も開催されています。

弘道館に隣接する水戸東武館（みとうぶかん）では，今も弘道館の授業であった北辰一刀流（ほくしんいっとうりゅう）を学ぶことができます。また，水戸城跡からほど近い那珂川では，同じく弘道館の授業であった水府流水術（すいふりゅうすいじゅつ）の遠泳が今も行われており，文武の伝統が継承されています。

図２－８　現在の弘道館・水戸城跡周辺



（２）建造物等

ア　弘道館（特別史跡）

弘道館は，水戸藩第９代藩主徳川斉昭により 1841（天保 12)年に創設された藩校です。水戸城三の丸の約 10．５ha という広大な敷地が充てられており，藩校の敷地としては全国最大の規模です。現在，特別史跡として指定されている面積は，３．４ha です。

施設は正庁・至善堂・孔子廟・八卦堂・鹿島神社・文館・武館・天文方・医学館・寄宿寮・調練場・矢場・砲術場ほか多数からなり，正庁を中心に右に文館，左に武館を配置し，文武一致を表すなど，その配置には建学精神に即して独特の工夫がこらされました。このうち，現存する正門附塀，正庁，至善堂は国の重要文化財に指定されています。また，弘道館記碑や，孔子廟戟門，種梅記碑といった歴史的建造物が現存し，孔子廟，鹿島神社，八卦堂等が復元・移築されました。

図２－９　現在の弘道館配置図（弘道館事務所提供）

（ア）正門（附塀）（重要文化財）

正門は，創建時の 1841（天保 12）年に弘道館の正式な出入口として建築されました。藩主の臨席や特別な行事の際にのみ使用され，学生や諸役人は通用門から出入りしていました。

總欅造りの四脚門で，禅宗系統の建物意匠を感じさせる工法が用いられ，妻側面に渦彫刻のある海老虹梁が架かっています。

正門（附塀）

（イ）正庁（重要文化財）

正庁は，弘道館が創建された 1841（天保 12）年に建築された建造物で，弘道館の中心的な建物であり，藩主が臨席して，学生の文武の大試験や諸儀礼を行いました。

様式は，藩主の御殿を模したとも見られます。正席の室構えは，トコ，棚，出書院などが付属し，豪華な装飾や彫刻こそありませんが，高い天井や塗装のある建具など格調高い書院建築となっています。軸部・造作材料は良質の桧・杉材を使用しています。それ以外は質素ではありますが，建物の性格上機能的な間取りとなっています。大棟と玄関の瓦棟は瓦を高く積み，鬼瓦を大きく見せ，白漆喰で化粧した威厳のある景観を見せています。

正庁

正席の間に接する縁側には斉昭自筆による「游於藝（げいにあそぶ）」の書が掲げられています。これは論語述而篇の一節「子曰く道に志し徳に拠り仁に依り芸に遊ぶ」によります。芸とは六芸，礼（礼儀作法），楽（音楽），射（弓術），御（馬術），書（習字），数（算術）を指し，文武に凝り固まらず，悠々と芸の道を究めるという意味です。正席の間の床の間には，弘道館の建学の精神が示された弘道館記碑の拓本が掲げられています。

（ウ）至善堂（重要文化財）

至善堂は，弘道館が創建された 1841（天保 12）年に建築された建造物で，藩主の休息所や諸公子の勉学の場として使用されました。江戸城開城後に最後の将軍徳川慶喜が一時期謹慎した場所でもあります。至善堂の名称は，斉昭が「大学（儒

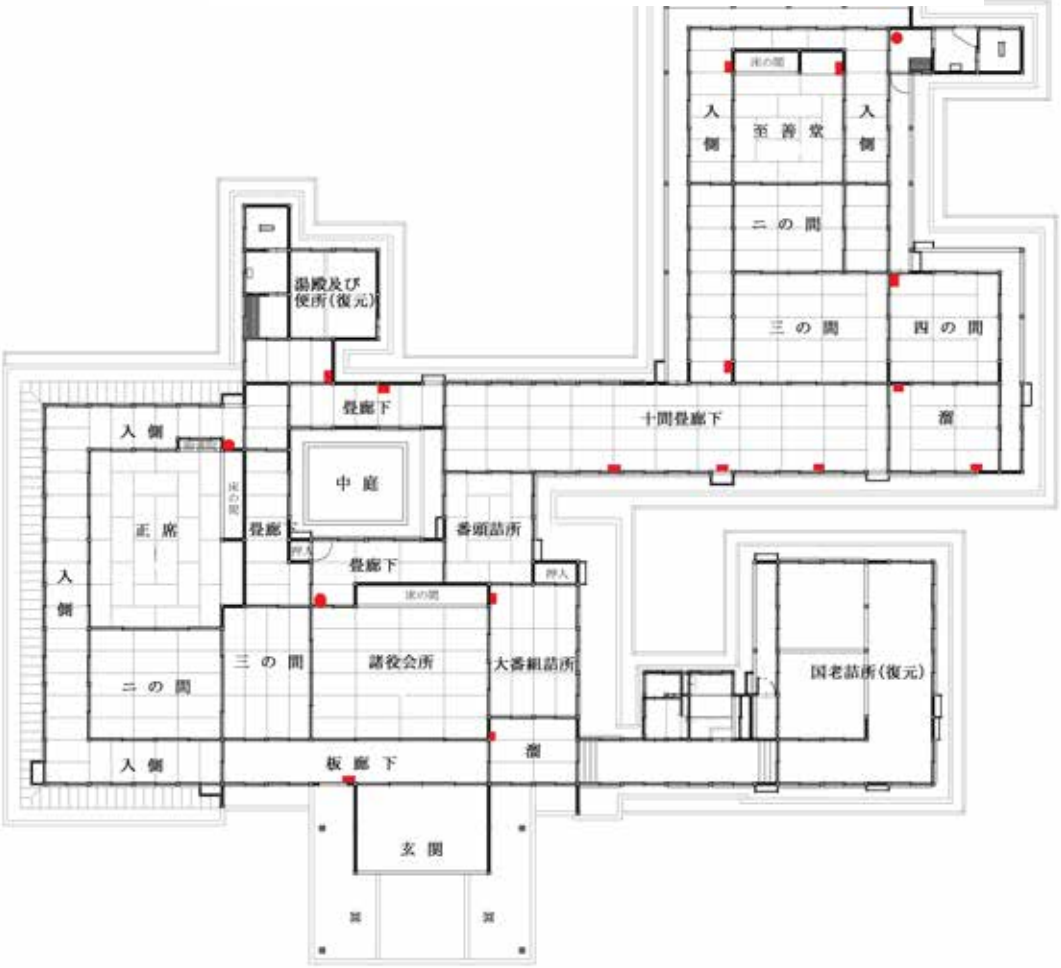
教の経書)」の一説からとって命名したもので，「人間は最高善に達し，かつその状態を維持することを理想とすべきである」という意味が込められています。

至善堂は，正庁を繋(つな)ぐ幅２間の渡廊下の西側から，至善堂（御座の間），二の間，三の間の３室が連ね，三の間の東側に四の間，溜の２室，北端に便所が付属しています。

至善堂

正庁と一体となって機能するように造られ，平面と同様に，屋根も連続して連なっています。柱の大きさなどは正庁よりもやや小ぶりで，軒の高さや棟高なども正庁より低く抑え，外観の格差がみられます。また，玄関・大床などは設けられていない書院風の建物です。

図２－10　現在の正庁及び至善堂の平面図（弘道館事務所提供）



（エ）弘道館記碑

弘道館が創建された 1841（天保 12）年に建築された石造物で，弘道館の敷地の中心に配置され，弘道館の精神的支柱として重要な施設です。

弘道館記碑

1837（天保８）年，徳川斉昭は自身の片腕で、幕末志士の指導者と言われた藤田東湖に建学の精神を示すため弘道館記の起草を命じ，昌平坂学問所（幕府の学校）の儒者であった佐藤一斎，彰考館総裁の会沢正志斎，弘道館教授頭取の青山延于の校訂を経て，完成しました。碑文への彫刻は 1839（天保 10）年より開始され，翌 1840（天保 11）年に完成しました。

碑面には「文武一致」,「神儒一致」,「忠孝一致」,「学問事業一致」,「治教一致」という五つの弘道館建学の精神が示されています。

石は幅 1.91m，厚さ 0.55m，高さ約 3.18mの茨城県久慈郡真弓山（現常陸太田市真弓山）から切り出された寒水石（大理石）が使用され，八卦堂の中に納められています（八卦堂は空襲で焼失し，現在は復元されたもの）。

（オ）種梅記碑

水戸藩藩校の弘道館の敷地に建てられた石碑で，1841（天保 12）年創建当時のものです。斉昭が江戸屋敷の梅を水戸に送り領内に植えさせたこと，梅は春に先駆けて花が咲き，詩作の良い題材となること，さらに梅の実は有事の際の非常食になること等が記されています。

種梅記碑

（カ）孔子廟戟門

戟門は，孔子廟を囲む築地塀の正面に位置する門です。孔子廟は 1945（昭和 20）年の空襲で焼失しましたが，戟門は焼失を免れました（孔子廟も 1970（昭和 45）年に復元）。

孔子廟戟門

禅宗様を基調とした門で，屋根の瓦葺形式は，中国風の意匠をとりいれています。木部材は細目の小振りの門で，中央間の戸

口上部にある火の形（火燈様）の幕板と扉の鏡板が特徴です。水戸藩が招いた明の学者朱舜水の聖堂模型の影響を受けて創建され，水戸藩の学問的伝統を継承する建造物といえます。

イ　水戸東武館（水戸市指定有形文化財（建造物））

水戸東武館

水戸東武館は，1874（明治７）年に水戸藩の剣術の主要な流派のひとつで，弘道館の武術の科目とされた北辰一刀流を学ぶ道場として，水戸藩家老小山小四郎屋敷跡に創建されました。道場は 1939（昭和 14)年に拡張されましたが，1945（昭和 20)年の空襲で焼失しました。しかし，全国有志から浄財が集まり，1953（昭和 28)年に同地に再建されました。威風堂々とした武家屋敷風の門構えと建物を有する剣道場で，床板は全部５間通しで，幅５寸，厚さ１寸２分の杉材が用いられています。あわせて，敷地内には俳人高野素十による「冬木伐って水戸東武館興る」の句碑も建立されました。

毎年３月には，全国の少年剣士が集う全国選抜少年剣道錬成大会が東武館の主催で開催されており，多くの少年剣士たちに水戸の東武館の名が知られています。

2015（平成 27）年に周辺道路の拡張に伴い，120m東に移築されました。

ウ　水戸城跡

水戸城は，平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて，常陸大掾氏の一族である馬場資幹が築いたのがはじまりです。以降，城やその周辺は水戸地方の中心地として発展し，江戸氏，佐竹氏，そして水戸徳川家によって城や城下が整備されていきました。

（ア）水戸城薬医門

（茨城県指定有形文化財（建造物））

安土桃山時代末期創建といわれ，佐竹氏によって造られたと考えられています。「水戸城実測図」（茨城県立図書館所蔵）の城門の記録から，二の丸から本丸に通じる橋詰門と想定されています。明治以降，別の場所に移されていましたが，1981（昭和 56）年に当時に近い場所として，県立水戸第一高等学校敷地内に移築されました。移築の際の調査で，棟木に 1733（享保 18）年の記載が確認でき，同年に大幅な修復が行われたと考えられています（『旧水戸城城内御門解体養生工事の報告』一色史彦，1978 年)。

正面の軒が深く，風格のある門構えで，現存最古の水戸城の建造物で，非常に貴重です。

移築前の様子。1977（昭和 52）年ころ

現在の様子。銅板葺に変更した

（イ）水戸城跡（塁（るい）及び濠（ほり））

（茨城県指定記念物（史跡），一部水戸市指定記念物（史跡））

寛永年間（1624 年～1644 年），水戸城修築により整備され，石垣を築かず，土塁が築かれました。水戸城の曲輪（くるわ）を兼ねており，現在も三の丸（弘道館）の西・北・東側を中心に良好な状態で保存されています。特に，西側の土塁と空堀は，堀幅 30m，土塁敷約 30m，土塁総延長 240m，比高差 13.7mを誇り，土造りの近世平山城の土塁・空堀遺構としては全国最大級です。

三の丸西側の塁及び濠

本丸と二の丸の間を走る空堀はＪＲ水郡線（すいぐんせん）が走り，二の丸と三の丸の間の空堀は，道路として活用されています。

（ウ）大手門・二の丸角櫓（茨城県指定記念物（史跡），一部水戸市指定記念物（史跡））

大手門は，弘道館の方角から見て大手橋を渡ったところにあり，1601（慶長６）年に水戸城主佐竹義宣（さたけよしのぶ）によって建設されました。二の丸と三の丸をつなぐ水戸城の正門であり，土塁に取り付く大手門としては、全国的でも最大級の大きさです。二の丸角櫓は二の丸の南西角にあった二階建の櫓で，土塀で大手門とつながっていました。ともに明治中頃までに撤去されましたが，櫓や土塀が築かれた土塁が良好な状態で残ります。また，2015（平成 27）年や 2017（平成 29）年の発掘調査で，土塁と大手門をつなぐ瓦塀が残されていることがわかりました。現在復元工事が進められ，大手門が 2019（令和元）年に，二の丸角櫓が 2020（令和２）年に完成する

予定です。

大手門発掘の様子

瓦塀のほか，溝も確認できた。

大手門瓦塀

発掘の結果，瓦塀が保存状況が良好な状態で検出された。

（エ）大手橋

大手橋は，水戸城の二の丸と三の丸を結ぶ橋として，1601（慶長６）年に水戸城主佐竹義宣によって建設されました。

何度も付け替えが行われ，1935（昭和 10）年に大手橋の歴史的背景や地元の人々の要望を反映し，江戸時代の様式を反映しつつ，鉄筋コンクリート造りとなりました。歴史的景観に配慮しつつ，最新技術を導入してまちづくりを進めた事例として価値ある建造物です(『～茨城の土木技術～茨城の土木遺産』公益社団法人土木学会関東支部茨城会，2016 年)。2010（平成 22）年に土木学会推奨土木遺産に認定されました。

大手橋

（３）人々の活動

水戸の学問の興隆は，水戸藩第２代藩主徳川光圀の時代に遡ります。光圀は，日本の歴史書（大日本史）の編纂事業として水戸城二の丸に水戸彰考館（しょうこうかん）を設けました。光圀は優れた学者を全国から招き，さらに長崎にいた中国（明）の学者である朱舜水（しゅしゅんすい）を招いたことから水戸の学問は盛えました。その後，第９代藩主徳川斉昭が三の丸に藩校弘道館を設けたことで，二の丸及び三の丸は，これ以上なく学問が盛んな地区となり，多くの学者や藩士の子弟が，二の丸角櫓を臨みながら堀に架かる大手橋を渡り，さらに大手門をくぐって，弘道館や水戸彰考館に通いました。

廃藩置県により水戸県ついで茨城県が誕生すると，弘道館は藩校としての役割を終え，初代茨城県庁となりました。しかし，弘道館を中心に栄えた水戸の学びの伝統は今も息づいています。

ア　文の継承

明治に入り，弘道館の跡地は二分され，半分は県庁の敷地として，残りの正庁や至善堂などの建造物，そして弘道館記碑や鹿島神社がある部分は 1885（明治 18）年に茨城第二公園（水戸公園）となり，1895（明治 28）年には公園の一部が水戸市高等小学校（現三の丸小学校）に分割されました。

茨城県高等女学校の仮校舎として至善堂が使用されていた様子

（『水戸二高百年史』より）

公園となった弘道館は，私立水戸幼稚園園舎（1889（明治 22）年１月～1921（大正 10）年３月），水戸市高等小学校分教室（1894（明治 27）年４月～1895（明治 28）年９月），茨城県高等女学校（現県立水戸二高，1900（明治 33）年４月～1903（明治 36）年２月），私立茨城聾唖（ろうあ）学校仮校舎（1908（明治 41）年２月～10 月）として，近代以降も教育的資産として断続的に利用されました。

また，水戸の学問の研究・教育団体である弘道学会（1890（明治 23）年設立）や水陽学会（1894（明治 27）年設立）が学習会等で活用し，弘道館は社会教育施設としての側面も有しました。

1945（昭和 20）年の空襲で，弘道館内の鹿島神社や，孔子廟，八卦堂などが焼失しましたが，弘道館正庁，至善堂，正門，弘道館記碑，種梅記碑，孔子廟戟門といった弘道館の中枢をなす建造物群は焼失を免れました。地元の人々が自らの命の危険をかえりみず，延焼した正庁の消火を行ったといいます。

三の丸小学校が全焼したため，弘道館は 1947（昭和 22）年までしばらく同校の仮校舎として活用されました（『創立八十年史』）。このように，戦後にかけても弘

道館は変わらず「学び舎」として活躍しました。

弘道館の教えを後世に伝えようとする動きも進められ，藩校関係者が弘道館での学びを後世に伝えるべく，私塾自彊舎（じきょうしゃ）を作り，水戸の学問を教えました。自彊舎は，弘道学舎，水戸学院へ姿を変え，さらに私立茨城中学校，1948（昭和 23）年に私立の茨城高等学校（中学校併設）となりました。

中等教育を学ぶことができた弘道館の役割を引き継ぐものとして，1878（明治 11）年に茨城師範学校予備学科が創設されました。入学者には自彊舎出身者がおり，当初同校の学びは弘道館と比較して新しく英学が加わっただけと言われるほど，弘道館の学びと似ていたとされます(『水戸市史下巻(一)』。その後同校は校名を数度変え，茨城県尋常中学校時代の 1896（明治 29）年には水戸城跡に移転し，現在は茨城県立水戸第一高等学校として，弘道館の役割が継承されています。今日も多くの生徒が薬医門を通って，学問に励んでいます。

1967（昭和 42）年度の弘道館学習
（『創立八十年史』水戸市立三の丸小学校 1973 年より）

戦後，改めて弘道館や水戸藩の学びを伝えようとする試みが行われるようになりました。弘道館では地元の小学生を招き，弘道館を紹介する講座を行っています。水戸城跡にある市立三の丸小学校では，1966（昭和 41）年より，「弘道館学習」を開始して，弘道館内で児童が弘道館職員やボランティアから弘道館や弘道館での学びを知る機会を設けています。

2009（平成 21）年より，地元の有志によって，親子を対象として，藩校名「弘道」の引用元となった「論語」を学ぶ論語塾が至善堂で行われ，弘道館ならではの学びの機会が広がっています。休日や祝日に弘道館に行けば，論語を読む子供たちの声が聞こえてきます。弘道館や水戸城跡周辺で学問に励む子供たちの姿は，江戸時代から続く，水戸の歴史的風致です。

魁・二の丸隊の解説

また，水戸の梅まつりの時期にあわせて，2005（平成 17）年水戸観光協会（現水戸観光コンベンション協会）の主催で，弘道館や水戸の歴史を学ぶ「弘道館公開講座」（講師：水戸史学研鑽会（けんさんかい）吉田塾）が開催されています。

市民によるボランティア活動も行われています。1997（平成９）年より，偕楽園とともに，弘道館において

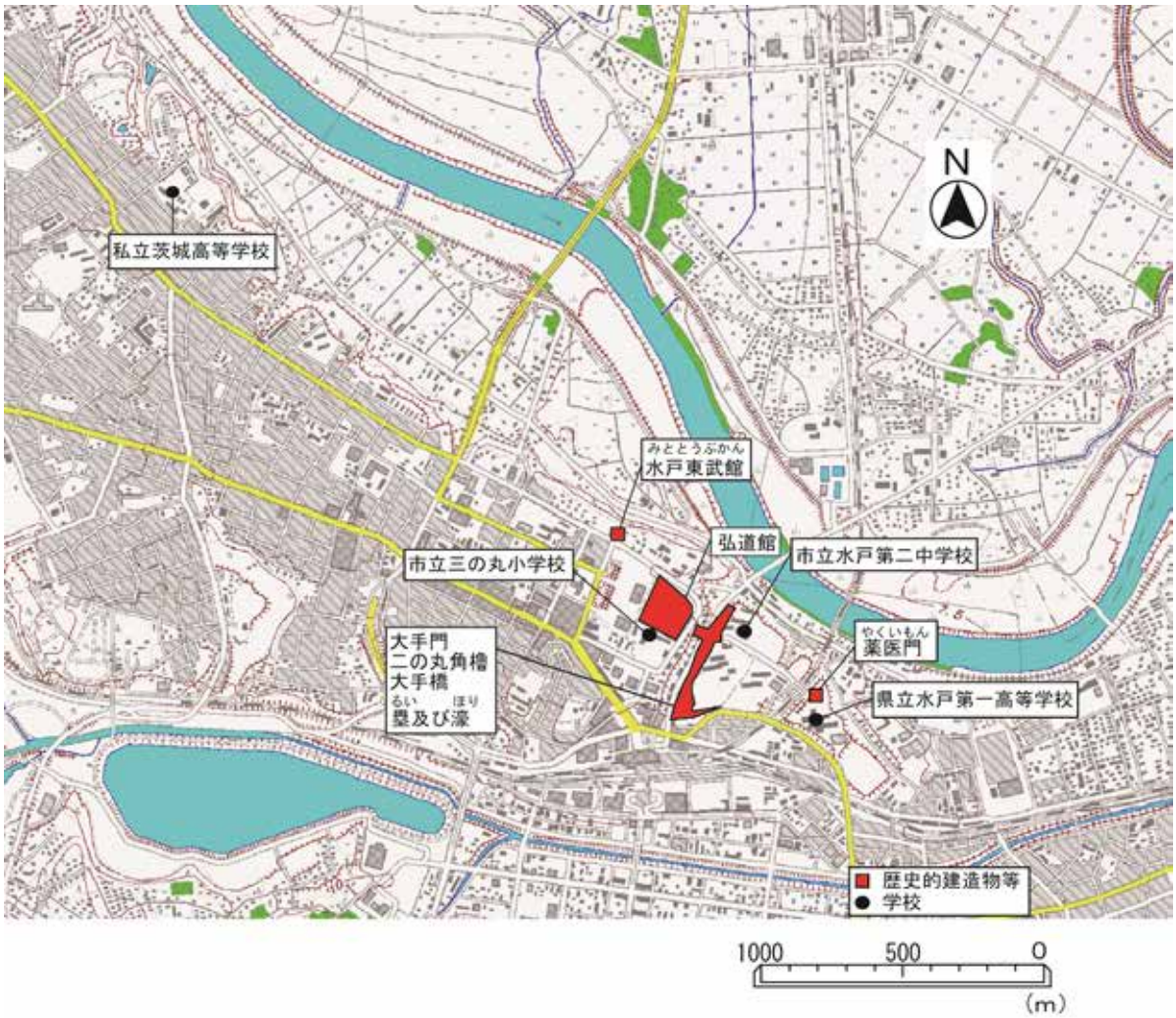
「歴史アドバイザー水戸」が弘道館や水戸藩の歴史を解説しています。

さらに，水戸城二の丸の水戸彰考館跡にある市立第二中学校では，2015（平成27）年度より生徒が「魁（さきがけ）・二の丸隊」を結成し，弘道館や水戸城跡周辺，偕楽園等で解説ボランティアを行っており，水戸を訪れた人々に水戸の歴史や文化を紹介する生徒たちの姿を見ることができます。

弘道館や水戸城跡周辺（三の丸地区）の市民によって，清掃活動を通して，景観を守る取組も行われています。当初は町内会主催で行われていましたが，1993（平成５）年に，三の丸地区内の各町内会員による三の丸自治コミュニティ連合会が組織され，弘道館や水戸城跡周辺の清掃活動を定期的に行っています。また，特別史跡内にある鹿島神社の例大祭**（→P116）**前後には，氏子有志によって鹿島神社周辺を中心に，弘道館の清掃活動が行われます。

さらに，弘道館に隣接する三の丸小学校や，水戸彰考館跡に建つ水戸市立第二中学校の生徒によって，水戸城跡や弘道館周辺の清掃活動が行われています。

図２－11　学校配置図



その他，弘道館の歴史や学びを伝えるものとして，水戸拓があります。水戸拓は，弘道館に伝わる水戸藩主や志士たちの遺墨を拓本にしたものです。文政年間に水戸の薬問屋だった岩田健文が長崎で中国人から拓本の技術を学んだのが始まりといわれ，弘道館内で本の出版を手がけていた北澤家に受け継がれました。

明治以降，北澤家は弘道館近くの八卦堂付近で売店を始め，1959（昭和 34）年に現在の弘道館の敷地内に移りました。技術は現在も北澤家に受け継がれ，北澤売店にて拓本が販売されています。

また，北澤家に伝わる版木は，水戸藩第２代藩主徳川光圀，第９代藩主斉昭，学者藤田東湖のものなど 100 点を超え，貴重な歴史資料となっています。

水戸拓の版木

イ　武の継承

（ア）北辰一刀流（水戸市指定無形文化財）

水戸の剣術は，徳川斉昭が文武を奨励するため弘道館を創設したころから一段と盛んになり，一刀流，新陰流，そして新陰流から生まれた水府流など，多くの流派が教えられました。特に，神道無念流と北辰一刀流が最も盛んで，特に斉昭が江戸の剣豪千葉周作を召抱えたことから，北辰一刀流は全盛を極めました。

水戸城三階櫓を背に稽古に励む様子

（昭和初期）

北辰一刀流は，千葉周作が創始した剣術を中心とした古武道の流派の一つです。周作やその子らは水戸藩に仕え，千葉周作門下の海保帆平は弘道館で剣術を指導しました。また，弘道館剣術方教授であった小澤寅吉が，1874（明治７）年に弘道館近傍に水戸東武館を開き，北辰一刀流を指導したことから，明治以降も今日に至るまで，北辰一刀流が水戸の地に残ることとなりました（『水戸市史下巻（一）』）。現在の水戸東武館における北辰一刀流の技は，代々口述で伝えられてきましたが，千葉周作が作成し，後年遺稿として刊行された『剣法秘訣』（1915 年）に記載されている技と，水戸東武館で継承された技は一致するものが多く，150 年以上の間，確実に継承されてきたことがわかります。

今日も水戸東武館では，市内を中心に多くの子弟が稽古に励んでいます。子供たちの普段の稽古は週三回行われており，準備運動，素振り，二人での面打ち，面返し胴，基本打ち，先生との切り返し，掛かり稽古，二人での稽古，切り返しと続き，最後に整列して礼で終わるのが基本的な流れです。

稽古に励む少年剣士たち

寒稽古が始まる元日には，早朝から剣道着姿に竹刀を持ち道場に向かう子供から大人までの姿を弘道館周辺で見ることができます。竹刀を交える音が道場から周辺に響き渡る寒稽古は，風物詩として親しまれています。また，梅まつりの期間中には，弘道館の正庁に隣接する対試場にて武術演舞を披露しており，多くの来訪者が水戸の文武両道の精神を目の当たりにすることができます。

（イ）水府流水術（水戸市指定無形文化財）

水府流水術は，弘道館で学ばれていた古式泳法です。水戸には江戸時代初期から「のし泳ぎ（横向きで泳ぐ方法）」を基本とする古式泳法が伝えられており，水戸藩初代藩主徳川頼房も，その息子の第２代藩主光圀も古式泳法の名手だったといわれます。水戸城とその城下に面する那珂川を利用して，多くの子弟が古式泳法の修行に励みました。

水府流水術の「のし泳ぎ」

この泳法は当初二つの流派（上町・下町）に分かれて発達しました。上町流は元禄年間（1688 年～1704 年）に島村孫右衛門正広が指南し，下町流は小松郡蔵，荷見守壮が指導しました。水戸藩第９代藩主徳川斉昭は，この二つを合わせて水府流水術と命名し，弘道館の武術の１科目として奨励しました。主に水戸城の麓を流れる那珂川にて練習が行われました。

泳法は横体（のし泳ぎ）ほか，平体・立体・潜水・浮身などがあり，明治以後は一般市民に広く普及し，那珂川に練習場が設けられました。1970（昭和 45)年，水府流水術協会が設立され，多くの市民が古式泳法を守り続けています。

那珂川の練習場で泳法を学ぶ子供たち

（昭和初期）（『水戸百年』より）

水戸市内の那珂川流域の小学校では，夏休みの水泳教室として，毎年水府流水術が指導されています。さらに 1991（平成３）年より，毎年，千歳橋から水府橋までの約 3.5km を泳ぐ那珂川遠泳大会が行われており，その際に水府流水術協会によって古式泳法が披露されます。

鳴り響く太鼓の音を合図に遠泳は始まり，水戸城跡や弘道館周辺から水面を望むと，のし泳ぎなど古式ゆかしい泳法が観賞できます。奥に水戸城跡を望みながら，橋の上や川岸から多くの市民が声援を送る姿は，水戸の夏の風物詩です。

那珂川遠泳大会

那珂川岸より水戸城跡を望む

図２－12　那珂川遠泳大会の経路

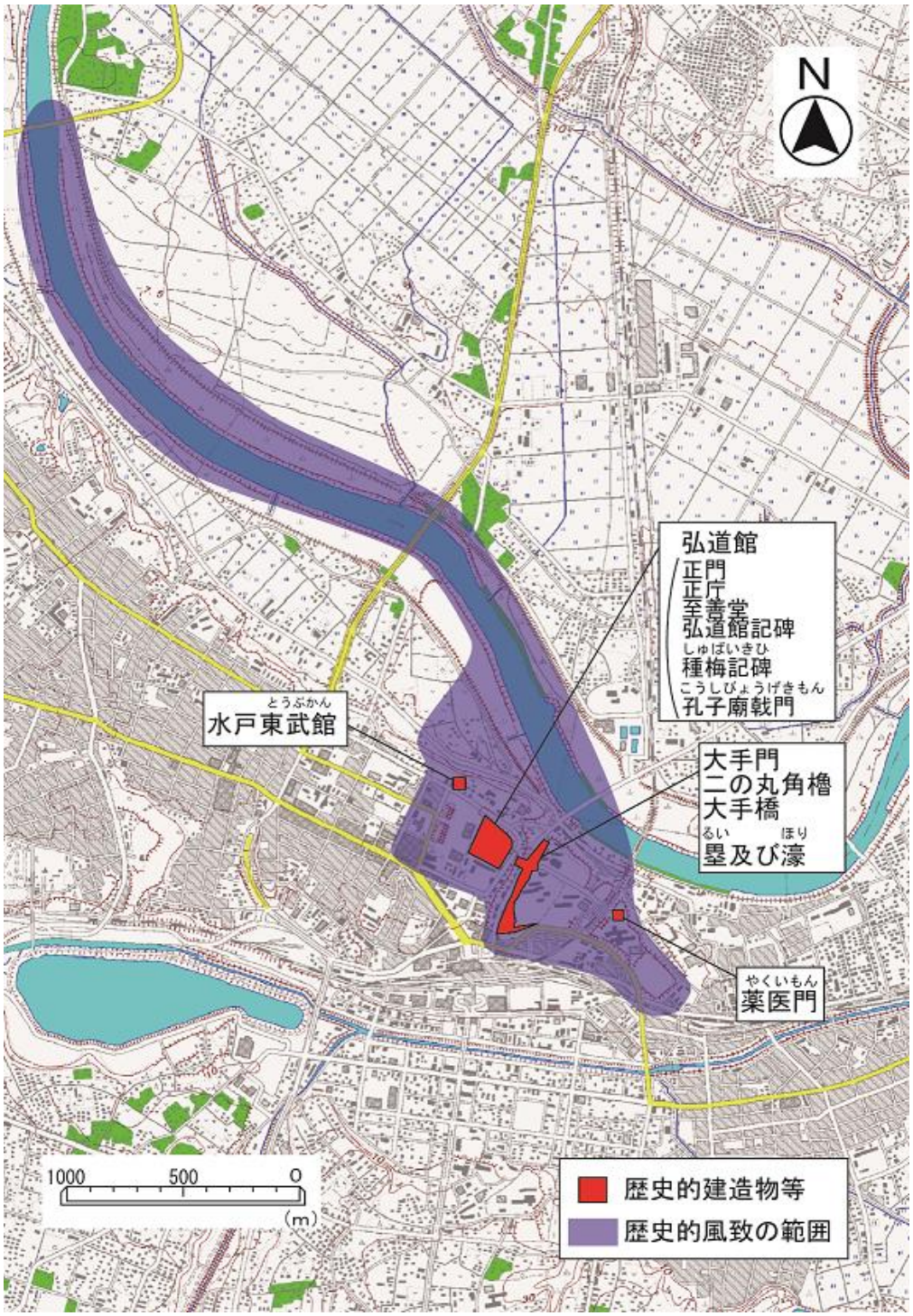
（４）まとめ

水戸城周辺は，古来より政治・経済の地であり，近世初期に水戸彰考館が置かれ，さらに近世後期に藩校弘道館が置かれると，水戸の文武の中心地となって栄えました。

近代以降，弘道館は校舎として利用され，現在でも論語塾などを通して，学びの場として活用されています。また，周辺は小学校，中学校，高等学校など多くの教育機関が立地し，文教地区となっています。これも近世以来の水戸の学びの伝統のひとつといえ，周辺小中学校では，弘道館の学びや歴史を学ぶ機会を設けています。さらに，水戸東武館では北辰一刀流が，水戸城跡からほど近い那珂川では，同じく弘道館の授業であった水府流水術が今も行われています。

水戸城跡周辺には，今日も論語や剣術，古式泳法といった伝統的な学びと，小学校，中学校，高等学校で現代の教育を学ぶ子供たちの元気な声が聞こえてきます。弘道館や水戸城跡が一体となって歴史的風致を形成し，地元の人々が大切に守っています。

図２－13　歴史的風致の範囲



３　郷土の祭礼にみる歴史的風致

はじめに

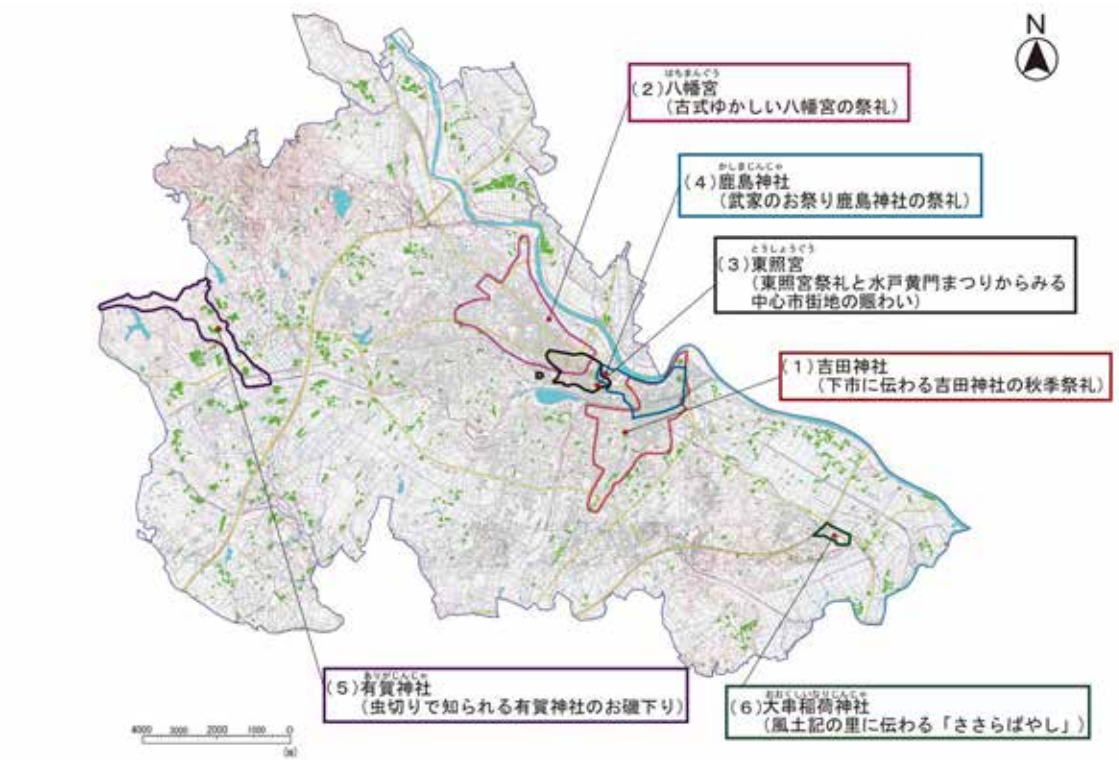
本市の中心市街地は，かつての水戸城下と重なります。そのため，旧城下やその周辺には，水戸城や水戸藩とゆかりのある祭りが今に残されています。

旧城下では，吉田神社の秋季祭礼や，八幡宮の例大祭，鹿島神社の例大祭が有名で，旧城下を神輿が練り歩きます。東照宮の例大祭では，今では神輿は登場しませんが，現在も旧城下の代表的な祭りとして知られています。また，東照宮前を会場に行われる水戸黄門まつりでは，東照宮の神輿のほか，周辺の神社を中心とした神輿や山車が登場して，新しい水戸の風物詩となっています。

有賀神社のお磯下りは，本市西部に位置する有賀神社からご神体の大鉾が出発して，旧城下を経由し，本市に隣接する大洗町の大洗磯前神社を目指します。逆に本市の東側に位置する大串稲荷神社では，秋の例祭で大串ささらばやしが披露されます。現在は神社内で披露されますが，江戸時代から昭和初期までは城下まで移動して披露されました。

これら代表的な祭りは古くからの由緒をもつ神社を中心に行われており，本市の代表的な歴史的風致となっています。

図２－14　歴史的風致の範囲



（１）下市に伝わる吉田神社の秋季祭礼

ア　はじめに

吉田神社は，約 1200 年前の創建といわれる由緒ある式内社で，常陸第三宮（ひたちだいさんのみや）と称されました。祭神として日本武尊（やまとたけるのみこと）を祀ります。

吉田神社の秋季祭礼

吉田神社の秋季祭礼は，古来より続く水戸を代表する祭礼で，現在は毎年 10 月 15 日に近い金・土・日曜日の３日間にわたり盛大に行われます。沿道には，神輿渡御のほか，江戸時代からの旧町名の名前を残す町内ごとに，大切に守り受け継いできた山車（だし）が繰り出され，ささらや獅子舞などの民俗芸能が披露されます。

二日目と三日目に，神輿が山車を従（したが）えながら，各町内を巡幸します。また，祭り期間中の夜には商店街及び備前堀に全部の山車が集結して盛り上げ，昔と変わらぬ迫力のある祭りの光景が目の当たりにできます。

イ　建造物等

（ア）吉田神社

吉田神社は，約 1200 年前に創建といわれる由緒ある式内社です。古代から中世にかけて広大な社領をもち，堂々たる社殿を構えていました。1873（明治６）年に県社となりましたが，1945（昭和 20）年空襲にあい社殿一式が全焼しました。1964（昭和 39）年に復興され，現在の本殿は神明造（しんめいづくり）銅板葺（どうばんぶき）です。

吉田神社拝殿

社殿は焼失したものの，1778（安永７）年と刻まれた石灯籠一対等，江戸時代製作の石塔が残されています。

また，境内にある日本武尊（やまとたけるのみこと）が休んだという故事がある三角山（日本武尊（やまとたけるのみこと）御遺蹟（ごいせき））では，1940 年（昭和 15）年に建てられた石碑があります。

石塔

三角山の石碑

（イ）薬王院

薬王院は天台宗の名刹で，かつては吉田神社の神宮寺でした。桓武天皇の勅願により，807（大同２）年に伝教大師最澄が創建したものと伝えられています。

a 本堂（重要文化財）

1527（大永７）年に焼失し，1529（享禄２）年に再建され，さらに 1686（貞享３）年に水戸藩第２代藩主徳川光圀が大修理を行いました。芽葺型銅板葺入母屋造の堂々たる姿で，室町期の建築様式を今に伝えます。

薬王院本堂

b 仁王門（茨城県指定有形文化財）

寄棟造（四柱造）の芽葺きの八脚門です。正面に連子窓を設け，仁王像（木造金剛力士像）が安置されています。扉がなく，扉をつける装置もないことから，もともと設けなかったものと考えられます。貞享年間（1684 年～1688 年）に本堂を整備した際に，あわせて境内も大幅に整備したことから，仁王門も貞享年間に建てられたと考えられています（『重要文化財薬王院本堂修理工事報告書』重要文化財薬王院本堂修理委員会，1971 年）。

薬王院仁王門

C 四脚門（水戸市指定有形文化財（建造物））

本柱２本の前後にそれぞれ２本の控柱があります。側面から見て妻が見える切妻造で，現在の屋根は関東には少ない本瓦葺です。貞享年間以降の絵図に現在の場所に門が描かれていること，また，彫刻の様式が江戸時代中期の特徴をもち，江戸時代後期には見られない垂木の反りをしていることから，建立は江戸時代中期と推定されています（『水戸の指定文化財』水戸市教育委員会，2010 年）。

薬王院四脚門

ウ　人々の活動

吉田神社の秋季祭礼（水戸市指定民俗文化財）

秋季祭礼は，下市御祭礼とも呼ばれています。起源は未詳ですが，江戸時代後期に彰考館総裁だった立原翠軒（たちはらすいけん）がまとめた『水戸歳時記（みとさいじき）』には「吉田明神祭」と記され，旧暦の９月 15 日に実施されていました（『水戸歳時記－水戸藩の庶民資料集成－』秋山房子編，崙書房，1983 年）。現在は氏子総代などを中心に実行委員会を組織して，毎年 10 月 15 日に近い金・土・日曜日の３日間にわたり盛大に行われます。

（ア）例大祭・前夜祭

祭りの初日となる金曜日は，午前 11 時に社殿において例大祭を行い，宮司が祭主として祝詞を奏上します。

夕方，境内に山車が集結し，前夜祭が行われます。午後６時 30 分より各山車に神様を招く神籬（ひもろぎ）が渡されるとともに，山車に一斉お祓いが行われます。午後７時過ぎよりお囃子（はやし）が始まり，参加団体は山車の上でそれぞれが思い思いに笛や太鼓などによる演奏や踊りを披露して，祭りを盛り上げます。人々は古くからの石塔の横を通って境内に入り，前夜祭を楽しみます。

例大祭

前夜祭

表２－３　吉田神社秋季祭礼参加山車一覧

番号	団体名	備考
壹	鳳会	神輿保存会
弐	紺屋町若連	
参	駅南山の会	
伍	本町山車	
六	武尊乃會	
七	一里塚若連	
八	藤柄若連	
※第四号は欠番		

（イ）神幸祭（じんこうさい）

土曜日は神幸祭が行われます。午前７時 45 分より祭典が始まり，御神体が神輿に遷（うつ）されます。拝殿を出御した後，台町（だいまち）のささら（竹で作った楽器などを演奏しながら，面をかぶった人が舞う）が先導役になります。

三角山神事

（右手奥が日本武尊御遺蹟）

境内の一角に玉垣で囲まれた三角山と称する日本武尊（やまとたけるのみこと）御遺蹟（ごいせき）を左回りで３周した後，正面に神輿が据えられ，三角山神事が行われます。これは，この聖域の前に神輿をとどめて神幸祭の斎行を奉告するとともに，還御までの無事を祈願するもので，宮司による祝詞奏上が行われます。

三角山神事が終わると直ちに行列を整えて，午前９時に神輿は自動車に載せられ，神社を出発します。また，山車も自動車に曳かれて，神輿に続きます。一行は薬王院といった歴史的建造物の傍を通過しながら，旧水戸街道を南に進みます。一里塚に着くと小祭典（しょうさいてん）が行われ，権禰宜（ごんねぎ）による祝詞が奏上されます。

一里塚での小祭典

小祭典が終了すると，神輿は北へ進みます。水戸駅の南側まで向かい，その後は東進したのち，午後１時過ぎに一度吉田神社に戻ります。途中巡幸しながら，地元民に対して小祭典が行われます。

午後２時 30 分改めて神輿が神社を出発し，今度は北へ向かいます。備前堀を渡り，細谷船渡（ほそやふなと）を目指します。

細谷船渡では神事（「舟渡神事」）が行われます。小祭典と違い，御仮殿（おかりでん）が設置され，宮司による祝詞が奏上されます。かつては，さらに船で那珂川を下り，那珂湊に磯下りをしたこともあったといわれています（栗田寛『常陸吉田神社事蹟考』，1889 年）。細谷船渡も那珂湊も，日本武尊にまつわる伝説を持つ場所で，こうした所に神輿を移すのは，か

舟渡神事

つて祭神が上陸した場所に戻ることで，神威を取り戻すという意味があると言われています。このように，海辺に渡御する神事は茨城県や千葉県，福島県，または南九州といった太平洋岸に多いといわれています（『茨城の神事』茨城県神社庁，1989年）。

舟渡神事終了後，城東・竹隈を通ります。午後６時からは神輿保存会「鳳会」会員により，神輿が威勢よく本町商店街を渡御します。沿道は歩行者天国となり，台町のささらを先導に，神輿が江戸時代からの旧町名の名前を残す町内ごとの山車を従えて渡御します。また，獅子舞などの民俗芸能が披露され，祭礼を盛り上げます。

夜の御仮殿の様子

その夜，神輿は曲尺手に設置された御仮殿に一泊し，巫女が寝ずの番を行います。

（ウ）還幸祭

日曜日は午後５時から仮殿発輿祭を斎行し，神輿は吉田神社を目指します。この日は神輿は車ではなく，鳳会により担がれて移動します。旧材木町・旧裡町・旧江戸町など各町内を担がれた後，神社に還幸するのは午後 10 時前となります。

宮入の際には，境内に参集した山車が神輿をお囃子によって盛大に迎え入れます。

宮入

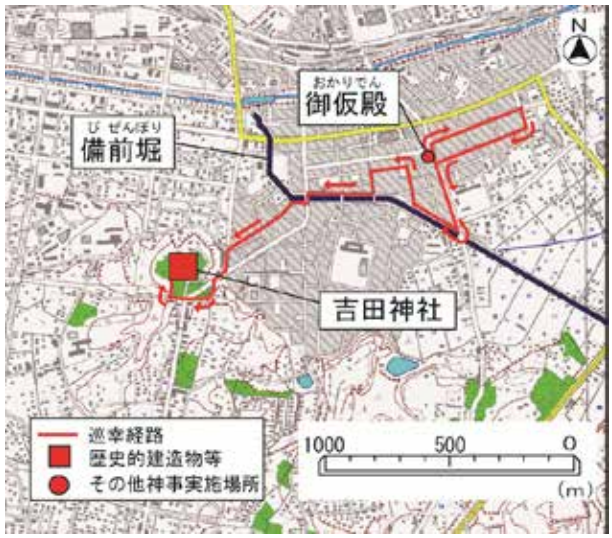
町内の山車

図２－15　祭礼の主な巡幸経路

（二日目午前）

（二日目午後）

（三日目）

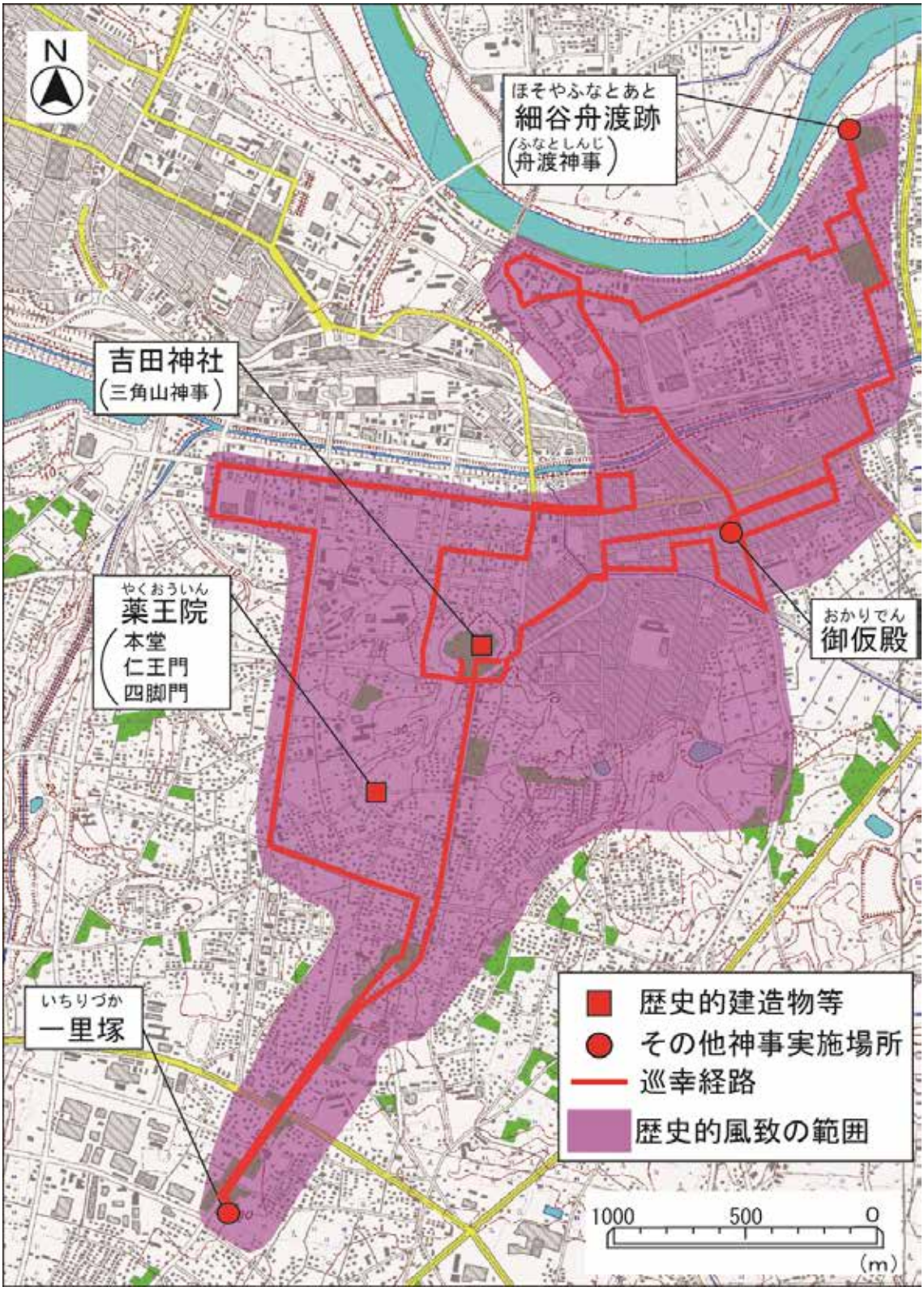


エ　まとめ

吉田神社は古くからの伝統と高い格式を有する神社で，秋季祭礼は遅くとも江戸時代から行われていました。現在でも，神輿が昼間各町内を練り歩き，夜は商店街や備前堀に山車が集結して盛り上げ，多くの見物人で賑わう水戸の秋を代表する行事です。

神社周辺に住む氏子たちが積極的に祭りに参加し，神輿や山車が薬王院等の歴史的建造物を背後に巡幸して，その様子を多くの人々が見物する様子は，江戸時代に賑やかに祭礼がおこなわれていた風情を偲ぶことができる貴重な歴史的風致です。

図２－16　歴史的風致の範囲



コラム　吉田神社と関わりのある神社

水戸市内には吉田神社にゆかりのある神社が残ります。これは古代から中世にかけて吉田神社が常陸第三宮として地域で権威を保持し，広大な社領を有した名残といえるでしょう。

① 笠原子安神社（笠原町）

旧緑岡村（現水戸市見川）に創建され，1309（延慶２）年に笠原山に遷座。子安明神と称します。水戸七社の一つであり，吉田神社の別宮として，吉田神社と深い関りを持ちました。水戸徳川家の尊敬の念も深く，水戸藩初代藩主徳川頼房が現在地に社殿を造営したと伝わっています。1910（明治 43）年に失火で社殿が全焼し，1913（大正２）年に再建されました。

水戸七社･･･愛宕神社，笠原子安神社，竈神社，国見神社，酒門神社，吉田神社，水戸神社。このうち国見神社は吉田神社境内にあります。

② 酒門神社（酒門町）

吉田神社の別宮で，水戸七社の一つです。社殿の創建年は不明ですが，1090（寛治４）年に堀河天皇より祭料を与えるとの宣旨が下されたと伝わっています。

笠原子安神社

酒門神社

③ 水戸神社（笠原町）

水戸七社の一つで，吉田神社の末社です。かつては水戸明神と呼ばれ，水戸城浄光寺曲輪にあり，「水戸」の名の起因となりました。水戸藩第２代藩主徳川光圀の命で吉田神社境内に遷座され，水戸城下の上水道である笠原水道の鎮守として人々に親しまれてきました。1869（明治２）年に現在の場所に遷祀され，水源の近い場所に祠が建てられています。境内社として吉田神社内にも社殿があります。

水戸神社

（２）古式ゆかしい八幡宮の祭礼

ア　はじめに

黒漆金銅装八角神輿

市街地北西部の八幡町に立地する八幡宮は，1592（文禄元）年に佐竹義宣が，水戸城の城内鎮守として常陸太田市馬場町にある馬場八幡宮より勧請したのがはじまりです。1694（元禄７）年に徳川光圀の神社整理によりいったん那珂西村（現・城里町）に移されますが，氏子等の度重なる請願により，1706（宝永３）年に水戸の現在地に再遷座されました。

八幡宮の例大祭は毎年４月 15 日に行われます。例大祭は御祭神の神徳を称え，国の隆昌と氏子・崇敬者の弥栄を祈念する八幡宮で最も重要な祭祀です。早朝より始まる祭礼に続き，黒漆金銅装八角神輿（市指定工芸品，以下「八角神輿」という。）が上市地区一帯を巡幸します。

この神事は，本殿（社殿）が水戸の現在地に再び移築した際，那珂川を舟で下り，八幡河原に上陸し還宮式が厳かに行われた故事に基づいて，遷座過程が祭礼の儀式となって伝承されています。

イ　建造物等

（ア）八幡宮

a 八幡宮本殿（重要文化財）

八幡宮本殿

建築年代は，内部の羽目板裡に残された墨書等によれば，1598（慶長３）年です。入母屋造り，和様・唐様の折衷様式で，組物や彫刻が非常に手の込んだ手法となっており，桃山時代から江戸初期らしい荘厳な造りです。当初，八幡小路（北見町）に鎮座され，1694（元禄７）年に那珂西村（城里町）に移り，1708（宝永５）年に現在の地に移築されたことが，屋根の棟束木札により明らかになっています。1998（平成 10）年には，本殿の解体保存修理が完了し，安土桃山時代創建当時のきらびやかな彩色が復原されました。

b 拝殿及び幣殿（水戸市指定有形文化財（建造物））

1775（安永 4）年に建立され，桁行約 9m，梁間約 5.5m の入母屋造り。拝殿と幣殿が接続します。太めの柱と小屋内の構造の工夫などとても堅牢に組立てられ，内部は柱が１本もない大きな空間となっています。北関東地域の江戸時代中期以降の建築では，彫刻の豪華さを競う傾向が見られますが，当殿は無駄な装飾を省いた美しさを持っています。

八幡宮拝殿及び幣殿

c 神楽殿（かぐらでん）（水戸市指定有形文化財（建造物））

社伝では，建立年代を宝暦から安永頃とします。社宝の神事面には 1745（延享２）年の墨書が残り，1856（安政３）年には暴風雨で屋根が大破し，修復が行われた（『重要文化財八幡宮本殿保存修理工事報告書』茨城県，1999 年）ことから，少なくとも江戸時代後期には建立されていました。

八幡宮神楽殿

鉄板葺寄棟造で，約９m の桁行を約 3.6m と約 5.4m にわけ，それぞれを２部屋とする間取りです。柱はすべて角材で，周囲，部屋境とも一間ごとに建てられています。

d 随神門（ずいじんもん）（水戸市指定有形文化財（建造物））

桁行 3.75m，梁間 3.26m，こけら葺形銅板葺の切妻造（きりづまづくり）です。こけら葺形銅板葺切妻造の随神社が接続します。梁と頭貫部には，波に龍の欄間彫刻がついています。随神台座内の墨書によると，1757（宝暦７）年に遷宮が行われたとあり，宝暦年間（1751～1764）より前に建立されていたと考えられます。1723（享保８）年に随神（左大臣と右大臣）の奉納がありました。

八幡宮随神門

（イ）祐月本店雛蔵（国の登録有形文化財）

1916（大正５）年に押絵羽子板・雛人形の製造販売店の祐月が建てたものです。大壁造・黒漆喰塗りの大規模な二階建てで，重厚かつ丁寧なつくりです。２口の土戸も良く残り，軸部の改造はありません。商家の屋敷構成を伝える，水戸でも少ない貴重な建造物です。

祐月本店雛蔵

（ウ）祇園寺

祇園寺は明の僧侶である心越禅師を開山とし，水戸藩第２代藩主徳川光圀の開基による曹洞宗の寺院です。もとは岱宗山天徳寺といいましたが，1712（正徳２）年，天徳寺を河和田村に移し，本寺を寿昌山祇園寺と改め，心越禅師を開山としました。

1858（安政５）年の火災で，ほとんどの建造物が焼失しましたが，1694（元禄７）年に建立され，仏の守護神である穢跡金剛の像を納めていた穢跡金剛尊天堂が現存しています。

祇園寺穢跡金剛尊天堂

（エ）保和苑

保和苑は，もとは大悲山保和院桂岸寺の庭園です。水戸藩第２代藩主徳川光圀が庭園を気に入り，保和園と名付けました。1926（昭和元）年，地元有志によって整備が行われ，池に築山を配して，「保和苑」と改称しました。

1950（昭和 25）年，桂岸寺より本市へ移管され，1961（昭和 36）年に保和苑振興協議会（現保和苑周辺史跡観光連絡協議会）が発足し，管理・運営しています。昭和 30 年代に，苑を拡張してあじさいの植栽が行われました。初夏には「水戸のあじさいまつり」が開催され，約 100 種 6,000 株のあじさいが咲き誇ります。

保和苑

ウ　人々の活動

（ア）例大祭

八幡宮の例大祭は，江戸時代は毎年３月15 日に行われていました。作者不詳ながら，江戸時代後期に作成され，当時の水戸の風俗を詳しく著した『常陸国水戸領風俗問状答』には「八幡祭」とあり，「花かつぎ」という５・６歳の女の子が美しく着飾り，従者が花を持って参加する行事があったと記されます(『水戸歳時記－水戸藩の庶民資料集成－』秋山房子編，崙書房，1983 年)。明治以降は毎年４月 15 日に行われています。

出発前の境内の様子

例大祭当日，早朝に式典が行われ，宮司により拝殿にて祝詞が奏上されるとともに，神前神楽舞の「浦安の舞」が奉奏されます。

その後御神体が八角神輿に遷され，左手に神楽殿を臨みながら，随神門を通り，旧水戸城下だった上市地区一帯を巡幸します。この神輿は，八幡宮が白旗山（しらはたやま）の現地に移転，遷座の際に御神体の遷座用として 1705（宝永２）年に町内氏子が寄進して製作したことが，納入の銘札や部材の墨書から明らかになっています。八幡宮の歴史を実証する資料であり，今日まで氏子たちによって大切に守られてきました。

巡幸中の様子

（八幡宮提供）

出発は午前 11 時 30 分頃で，巡幸に当たっては，現在はすべての順路で自動車を使用し，車上で太鼓を打ちながら移動します。神輿はまず八幡社（はちまんしゃ）（八幡河原（はちまんかわら））を目指します。途中，上水戸（谷中（やなか））と旧袴塚（はかまづか）ではテーブルを使った祭壇が地元の人々によって用意され，地元の人々にお祓いを行います。

八幡河原での「つばな引き神事」

（八幡宮提供）

八幡社は地元の人々と八幡宮によって

共同で管理されています（かつての社は 1987（昭和 62）年の那珂川の洪水で流出）。ここでの神事は「つばな引き神事」と呼ばれており，社前で八幡宮の宮司が祝詞を奏上します。神事終了後，八幡社の敷地にテーブルを用意して，八幡宮や氏子と崇敬者による直会（なおらい）が行われます。

神輿はその後，中心市街地を巡幸します。途中，裡五軒町，鉄砲町といった旧町名ではテーブルで祭壇が設けられ，地元の人々にお祓いを行いながら進みます。八幡宮に到着するのは午後 3 時 30 分頃になります。

巡幸では，本市の中心市街地及び，八幡宮，祇園寺，保和苑（ほわえん），祐月本店雛蔵など，歴史的資産が集積する市街地北西部の寺社群周辺を巡幸します。満開に桜が咲き誇る華やかな雰囲気のなか，各町で人々の祈願を受けながら神輿が進み，八幡宮に到着します。

巡幸にあわせ，境内では神賑行事（しんしんぎょうじ）が行われます。内容は年により異なりますが，神楽殿では箏や尺八の奉納演奏や古武道の演舞などが行われ，またお赤飯や抹茶等が参拝者に振舞われます。

さらに当日夜，特殊神事として一年間の無病息災を祈願する湯立神楽（ゆたてかぐら）が行われます。これは，釜を中心に太鼓・笛の演奏にあわせて，巫女が舞を奉納し，宮司が釜の湯でお祓いをするもので，昼の神賑行事の際にも行うことがあります。

神賑行事の様子
（八幡宮提供）

湯立神楽の様子（八幡宮提供）

（イ）八鳳会による神輿渡御

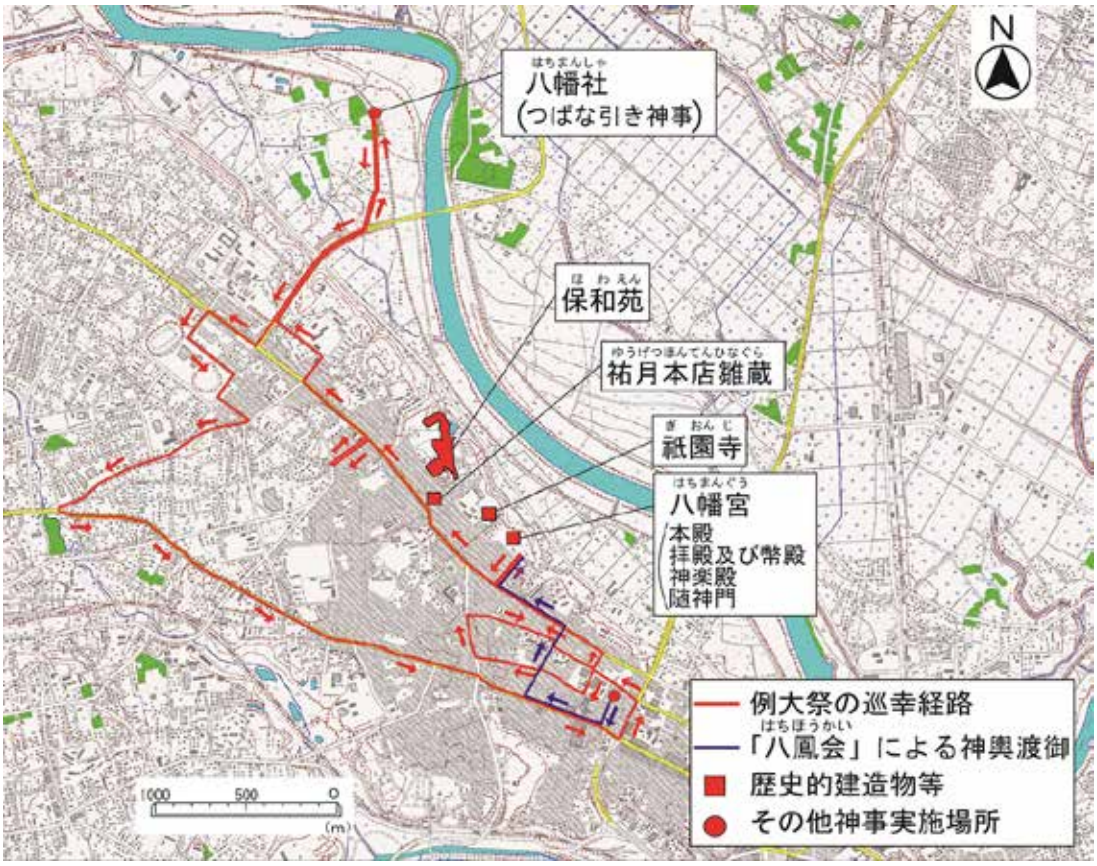
例大祭にあわせて，４月 15 日の前後の日曜日に，八幡宮の氏子・崇敬会で組織される，「八幡宮氏子神輿同好会『八鳳会』」による神輿渡御が行われます。この時，華やかな衣装を身にまとった稚児（神様のお使い役の幼児）の行列が同行します。この時は八角神輿ではなく，別の神輿を使用します。

出発にあたり，拝殿にて宮司による祝詞が奏上され，御神体が神輿に遷されます。その後自動車にて神輿を移動し，水戸芸術館の隣から出発します。途中，京成百貨店などを経由しながら，八幡宮を目指します。

八鳳会による神輿渡御

稚児の同行（八幡宮提供）

図２－17　例大祭及び八鳳会の神輿の巡幸経路

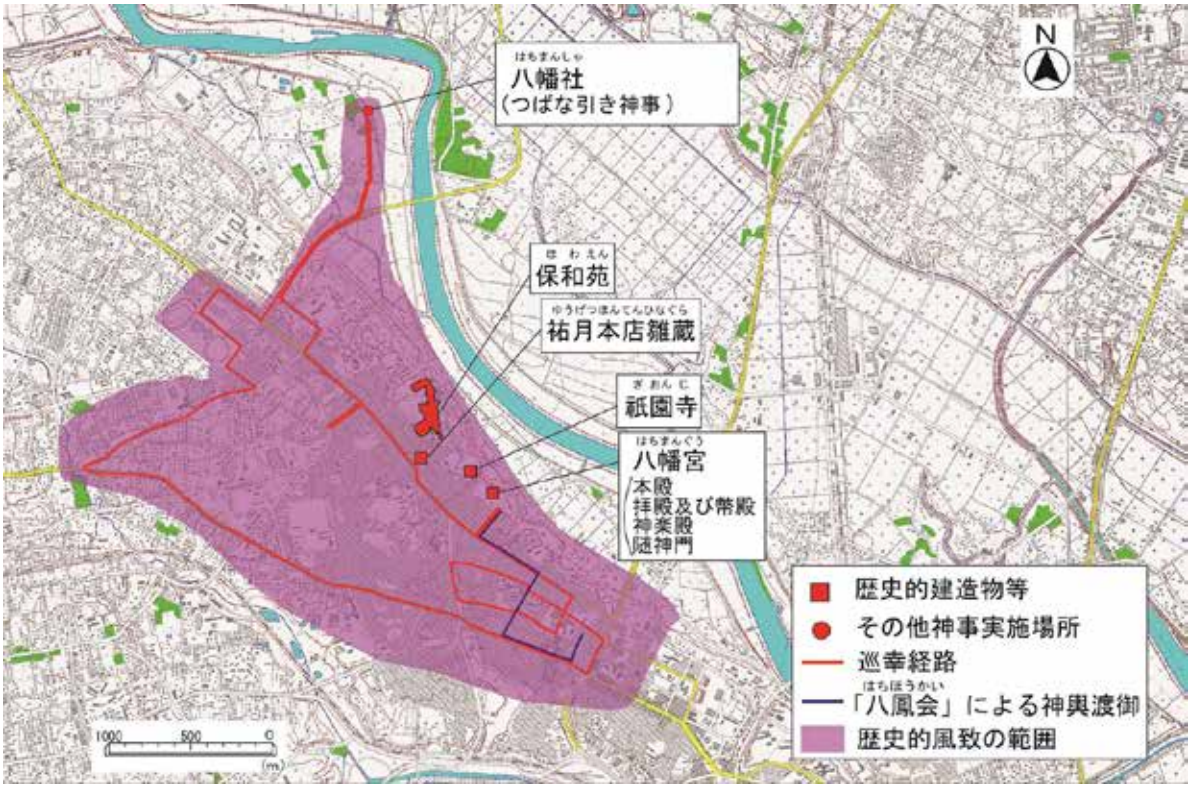


エ　まとめ

八幡宮は，1592（文禄元）年に佐竹義宣が水戸城に勧請し，一度徳川光圀の神社整理により那珂西村に移されましたが，1707（宝永４）年に現在地に再遷座された歴史をもちます。例大祭は，水戸の現在地に再び移築する際の遷宮式が厳（おごそ）かに行われた故事に倣（なら）い行われており，その遷座過程が，江戸時代から現在まで，祭礼の儀式となって伝承されていることから，歴史資料的にも貴重な行事となっています。

寺町として栄えたまちには，古くからの寺社はもちろん，昔ながらの古い土蔵や人形店などが残ります。このような歴史的景観は，桜が満開に咲くなかを神輿が通ることでさらに引き立てられます。また，神輿の巡幸経路の沿道や境内での神賑行事には多くの人々が集まります。水戸城下を華やかに飾る歴史的風致といえます。

図２－18　歴史的風致の範囲



（３）東照宮の祭礼と水戸黄門まつりからみる中心市街地の賑わい

ア　はじめに

水戸市の玄関口である水戸駅北口から中心市街地方面に向かって歩くと程なく，東照宮の赤い鳥居が目に入ってきます。東照宮は，水戸藩初代藩主頼房が，父家康のために 1621（元和７）年，日光東照宮にならって造営したものです。

東照宮の祭礼

東照宮の祭礼は，江戸時代には御三家である水戸藩において，最も中心となる祭礼でした。祭礼の神輿は 1646（正保３）年４月 17 日に初めて巡幸し，以降毎年同日に行うようになりました。身分に関わらず参加し，様々な場所から見物人が訪れました。神輿の他に様々な趣向を凝（こ）らした出し物が山車に乗せられて中心市街地を練り歩き，芸をする者も多く，混乱を避けるために各所に警備を行う辻番をたてるほど盛大に執り行われてきました。

そして現在，夏になると東照宮の前の大通りに多くの人々が集まり，東照宮と非常にゆかりのある水戸藩第２代藩主徳川光圀の名をいただいた祭り「水戸黄門まつり」が行われます。そこでは，かつて東照宮の祭礼で神輿が練り歩いたように，東照宮を含む，多くの神輿や山車が中心市街地を練り歩き，新しい水戸の名物となっています。

水戸黄門まつり

イ　建造物等

（ア）東照宮

1621（元和７）年に水戸藩初代藩主徳川頼房（とくがわよりふさ）が父家康を祀るために社殿を創建しました。1699（元禄 12）年に第２代藩主光圀が当地を常磐山と改称しました。長らく天台・浄土両宗の社僧が法会を遂行していましたが，1843（天保 14）年に第９代藩主徳川斉昭は仏祭を廃止しました。1936（昭和 11）年になって頼房を配祀（はいし）しました。

東照宮拝殿

a　社殿

かつての社殿は，日光東照宮にも似た壮麗（そうれい）な

建築物で，旧国宝に指定されていましたが，1945（昭和 20）年の空襲で全焼しました。現在の社殿は 1962（昭和 37）年に再建されたものです。銅板葺朱塗（どうばんぶきしゅぬり）の本殿が再建されたほか，社務所，宝物庫，玉垣，社殿等もすべて竣工しました。

燈籠

b　燈籠（とうろう）（水戸市指定有形文化財（工芸品））

1651（慶安４）年，徳川頼房が祭神である徳川家康の 33 回忌にあわせて奉納したといわれています。八角形の大理石の基壇の上に据えられ，基盤には竜紋が刻まれます。笠には徳川家の家紋である葵紋が配されます。

（イ）常磐神社（ときわじんじゃ）（→Ｐ63）

（ウ）旧川崎銀行水戸支店（きゅうかわさきぎんこう）

旧川崎銀行水戸支店

川崎銀行は，水戸藩出身の川崎八右衛門が，1880（明治 13）年に東京・日本橋において設立した銀行です。同年に水戸支店が現在の泉町３丁目で開設され，1909（明治 42）年，優雅な屋根を持つ本格的な洋風建築が建てられました。川崎銀行はその後合併を繰り返し，1943（昭和 18）年に三菱銀行に合併されました。この間，建物は変わらず銀行として活用されていましたが，1945（昭和 20）年８月の大空襲により，外壁を残して焼失しました。戦後，1951（昭和 26）年に修復され，2019（平成 31）年２月まで三菱ＵＦＪ銀行水戸支店として営業されました。

（エ）泉町会館（いずみちょうかいかん）

泉町会館

戦後の 1955（昭和 30）年に復興のシンボルとして創建された，二階建ての建造物です。「オール泉町商店会（泉町の五つの商店街）」の事務局として活用されていました。2015（平成 27）年に耐震補強整備が行われ，内部を一部吹き抜けにするなど，改築が行われました。現在もオー

ル泉町商店会の所有ですが，賃貸として活用されています。

ウ　人々の活動

（ア）東照宮の祭礼

東照宮の祭礼は，江戸時代には御三家である水戸藩において，最も中心となる祭礼でした。祭礼は 1646（正保３）年 4 月 17 日に初めて巡幸されて以降，毎年この日に行うようになりました（特別展図録『頼重と光圀』，茨城県立歴史館，2011 年）。

1672（寛文 12）年，水戸藩第２代藩主徳川光圀は藩士のうち藩主の親衛隊ともいうべき大番組（おおばんぐみ）と書院番組（しょいんばんぐみ）に属する者は甲冑着用で馬に乗り１年交代で，さらに御目見以上の者には長裃（ながかみしも）などの礼服着用で神輿の供を命じました。各町内からはさまざまな出し物が屋台に乗せられて巡回しました（『頼重と光圀』）。

水戸藩士西野正府（にしの まさくら）が著した『享保日記』には，身分に関係なく祭礼に参加し，大いに賑わったと記されています（『随筆百花苑（第 15 巻）』中央公論社，1981 年）。また，江戸時代後期に学者立原翠軒が著した『水戸歳時記』には，各町内により様々な踊りや狂言が行われ，藩士は甲冑を着用しなくなる一方，槍や幕など「美ヲ尽クシテカサ（飾）ル」と記します（『水戸歳時記－水戸藩の庶民資料集成－』秋山房子編，崙書房，1983 年）。

明治に入り，徳川幕府が崩壊すると，全国の多くの東照宮は姿を消しました。しかし，水戸徳川家のお膝元であった水戸の東照宮は存続し，数年に一度となったものの，神輿の巡幸はしばらく続けられました。現在は例大祭ではなく，夏に中心市街地で行われる「水戸黄門まつり」にて神輿が登場します。東照宮の祭礼は今日でも水戸の主要な祭礼の一つです。

東照宮 300 年の際の例大祭の記念写真（1916 年（大正５）年）

（左，東照宮所蔵。右，『水戸百年』より）

例大祭では宮司が神饌（しんせん）を供えて，祝詞を奏上し，続いて巫女らが「浦安の舞」を奉納します。祭礼後，参列者にはお神酒が振る舞われます。

さらに，例大祭の次の日曜日には，社殿や燈籠が建ち並ぶ広場を会場に境内に屋

台が出て，茶会が行われるなど，神賑行事が行われます。

他にも，主な東照宮の祭礼は以下の通りで，氏子や地元の人々を中心に市民が集まり，賑やかに行われます。

2021（令和３）年に創設 400 年を迎えるのを記念として，同年の例大祭で再び神輿を出す計画が東照宮で計画されています。

表２－４　主要な東照宮の祭礼

祭礼	開催日	
節分祭	2 月 3 日	
例大祭	4 月 17 日	徳川家康命日
大祓式	6 月 30 日	
夏まつり	7月第3日曜日	海の日
威公祭	11 月 12 日	徳川頼房命日
大祓式	12 月 31 日	

（イ） 水戸黄門まつり

水戸黄門まつりは，毎年８月第１週の金曜日から日曜日に開催されます。

1935（昭和 10）年より始まった「七夕まつり」と秋の「広告祭」を合体させたものとして，1961（昭和 36）年に始まりました。同年に，映画『水戸黄門、助さん、格さん 大暴れ』撮影の際，俳優月形龍之介が水戸市役所を水戸黄門の旅姿で訪問したことから，黄門まつりのアイデアがうまれたといわれています。当初は「水戸の七夕黄門まつり」と呼ばれていましたが，1992（平成４）年に「水戸黄門まつり」と改称し，1997（平成９）年に大幅にリニューアルして，現在に至ります。

昭和 30 年代の黄門まつりの様子

（『水戸百年』より）

開催１週間程前になると，会場周辺に提灯やのぼり旗といった装飾が施され，まつりが近いことを実感できます。

初日の金曜日の午前に，常磐神社にて奉告祭（ほうこくさい）が行われます。関係者が拝殿に集まり，宮司が祝詞を奏上し，巫女が舞を奉納して，まつりの成功を祈願します。

二日目の土曜日と三日目の日曜日には，市街地を中心に山車巡幸 ，神輿連合渡御，水戸

奉告祭の様子

黄門パレード，市民カーニバル in MITO などのイベントが開催されます。特に盛り上がるのが，中心市街地と下市を舞台とする山車と神輿の巡幸で，とりわけ旧川崎銀行水戸支店や泉町会館の前を順路とする中心市街地の山車巡幸と神輿連合渡御では，東照宮を含め，市内さらには市外神輿や山車も登場します。

水戸黄門まつりは水戸を代表するイベントとなり，1996（平成８）年，国道 50 号線のうち神輿や山車が練り歩く場所の道路愛称名が，「黄門さん通り」と制定されました。

中心市街地を多くの神輿と山車が練り歩く様子は圧巻で，水戸の夏を彩る名物です。（表２－５参照）

中心市街地を練り歩く山車

（写真は東照宮）

表２－５　水戸黄門まつりに参加する山車・神輿一覧（2018 年度分）

	団体名	備考　※は市外
山車（14 台）	南町二丁目商店街振興組合	地元南町二丁目商店街
	南町三丁目商店街振興組合	地元南町三丁目商店街
	泉町山車部会水泉連	地元泉町
	榮壽會（えいじゅかい）	地元わかな保育学童クラブ
	東照宮祭り連	東照宮氏子
	一里塚若連	吉田神社氏子
	久慈浜濱連	日立市の有志　※
	東木倉（ひがしきのくら）太鼓大杉会	那珂市東木倉の和太鼓集団　※
	石川ばやし保存会	地元元石川
	大洗篠伸会（しょうしんかい）	大洗町の祭り囃子　※
	本町囃子連	地元本町
	大工町地区連合	地元大工町
	堀之内青年会	那珂市の山車　※
	武尊乃会（たけるのかい）	吉田神社氏子
神輿（11 基）	鳳会（おおとりかい）	吉田神社氏子
	雷会（いかづちかい）	鹿島神社氏子
	八鳳会（はちほうかい）	八幡宮氏子
	磐会（おおいわかい）	常磐神社氏子
	日吉會（ひよしかい）	日吉神社氏子
	県庁神輿会	茨城県庁
	水戸市役所僊湖会（せんこかい）	水戸市役所
	鶴祭会（かくさいかい）	茨城町八坂神社氏子　※
	大綱会（おおつなかい）	飯綱神社氏子
	水戸雷神会	別雷皇太神氏子
	魁会（さきがけかい）	東照宮氏子

神輿は出ないものの，担ぎ手として参加する団体（７団体，いずれも市外）

伍倫会（ごりんかい）	笠間八坂神社
東鳳会（あづまかい）	勝田吉田神社
鶯友睦会（おうゆうむつみかい）	友部町民神輿
鶯友睦会（おうゆうむつみかい）	友部町民神輿
小瀬　同心睦会	大宮町民神輿（旧緒川村）
久慈浜神輿会	日立大甕神社
大洗　磯睦会（いそむつみかい）	大洗町民神輿

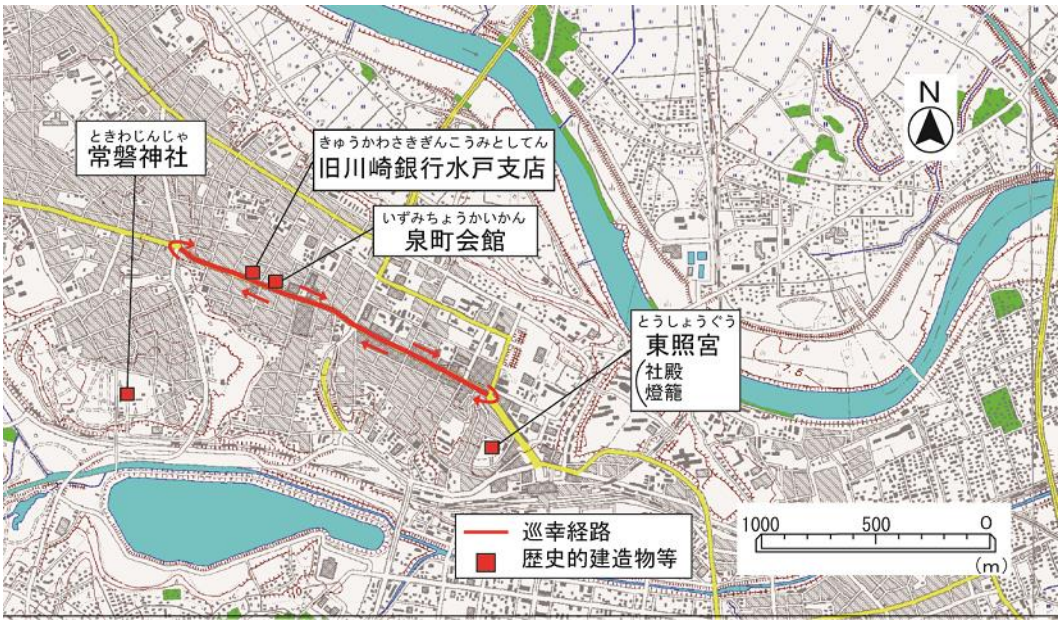
常磐神社の神輿

日吉神社の神輿

別雷皇太神の神輿

南町二丁目商店街振興組合の山車

図２－19　山車と神輿の巡幸経路



エ　まとめ

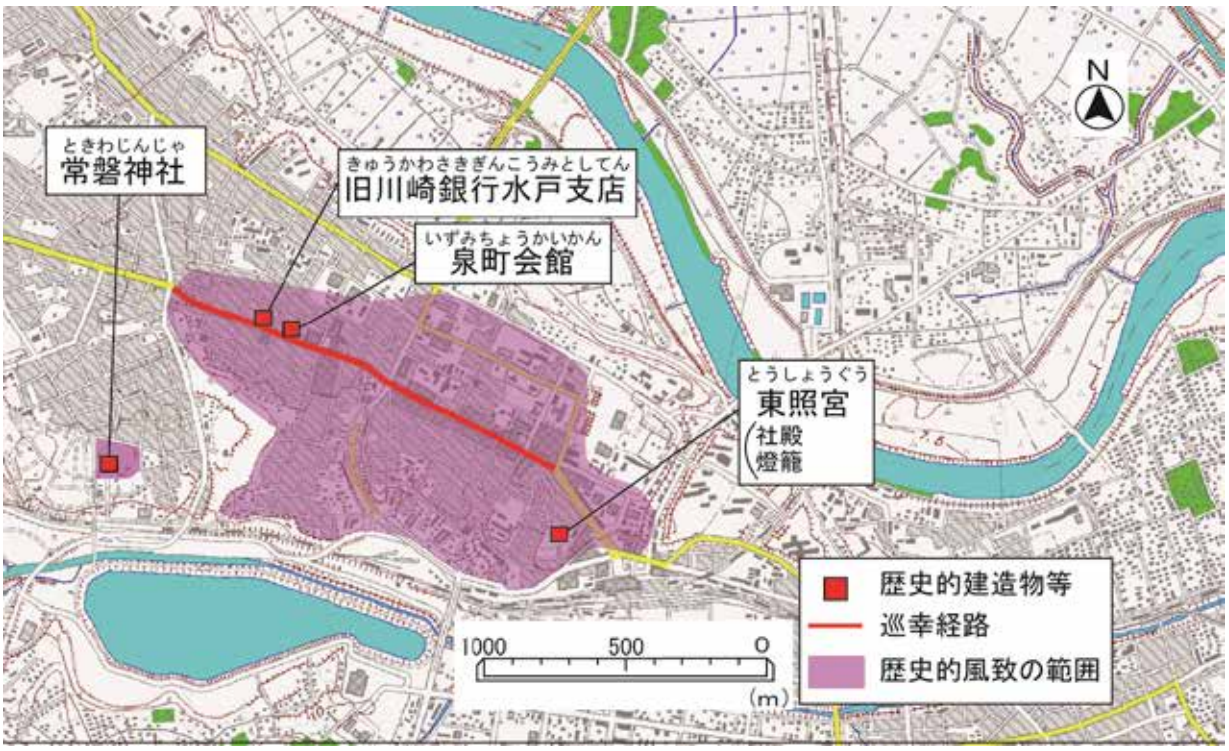
東照宮は，水戸藩初代藩主頼房が父家康のために，日光東照宮にならって造営しました。東照宮の祭礼は，江戸時代には御三家である水戸藩において，最も中心となる祭礼となり，神輿の他に様々な趣向を凝らした出し物が練り歩き，水戸藩士が神輿を固め，藩士も領民も参加して盛大に執り行われてきました。

現在例大祭で神輿は登場しませんが，今日でも本市の主要な祭礼の一つに数えられます。北関東屈指の城下町だった風情と伝統が感じられるとともに，御三家の一つ水戸徳川家のお膝元であるという，水戸の人々のアイデンティティに密接に関わる歴史的風致です。

東照宮の前を通り，水戸黄門まつりのメイン会場である国道 50 号線周辺は，戦後水戸の中心市街地となり，城下の面影を残しつつ，新しいビルが立ち並びました。

近代の洋風建築の前を伝統的な山車や神輿が巡幸する様子は，水戸の発展を象徴する風景であり，梅まつりが本市のもっとも華やかな歴史的風致であるならば，水戸黄門まつりはもっとも賑やかになる歴史的風致であるといえます。

図２－20　歴史的風致の範囲



（４）武家のお祭り鹿島神社の祭礼

ア　はじめに

鹿島神社の大神輿

弘道館内にある鹿島神社は，水戸藩第９代藩主徳川斉昭が弘道館を開設した際，神儒一致の精神から，孔子廟とともに藩校の中心区域に据えた神社です。鹿島神宮から分霊を迎え，1857（安政４）年５月９日に創設しました。

現在の社殿は，1973（昭和 48）年の第 60 回伊勢神宮式年遷宮で風日祈宮（伊勢神宮の境内別宮）旧殿を譲り受けたもので，1975（昭和 50）年５月に完工しました。1896（明治 29）年，公園地寄りの境内約 5,500 ㎡を削られましたが，現在は弘道館公園全体として国の特別史跡に指定されています。

1857（安政４）年５月９日の本開館式にあわせ，鹿島神社にて祭礼が行われ（「（弘道館）学校日記　安政４年」（茨城県立歴史館所蔵）），以降鹿島神社で引き続き祭礼が行われたことが，「鹿島神社孔子廟行事書類」（弘道館事務所蔵。明治初期に作成され，幕末から明治初期にかけての鹿島神社の祭礼を記したもの。）に記録されています。現在も，御分霊が遷祀された日にちなみ，毎年５月９日に例大祭が執り行われています。その前後の休日に実施される神幸祭では，多くの氏子たちが住む水戸城下の武家地であった城東地区を巡幸経路としており，大神輿が下市の旧武家屋敷周辺を練り歩きます。

イ　建造物等

鹿島神社

鹿島神社

1945（昭和 20）年８月２日の空襲で弘道館創設以来の本殿一式が焼失したため，第 60 回伊勢神宮式年遷宮の後，伊勢神宮内宮の境内別宮である風日祈宮の旧殿一式（本殿，拝殿，中門及び瑞垣。昭和 28 年建造）が特別譲渡されて，1974（昭和 49）年に移築されました。伊勢神宮独自の建築技法である神明造が用いられています。

伊勢神宮の社殿は式年遷宮ごとの造営後 20

年で解体されるため，旧社殿一式が残された貴重な建造物です。水戸市指定有形文化財（建造物）に指定しています。

一方，鹿島神社拝殿の正面に位置する石灯籠には，「大正二年十一月穀旦　奉納　戸村義令　栗林保孝謹書」，下に「作事監督　大串孝之介　石工　大石忠蔵」と記されます。1913（大正２）年に建てられ，空襲で消失せずに残されたものです。

また，神社の敷地内にある要石歌碑は，水戸藩第９代藩主徳川斉昭の詠及び書で，万葉仮名を用いて「行末毛　富美奈太画幣曽蜻島　大和乃道存　要那里家流（日本人の大和心の道を踏みたがえないように心がけることが大切である）」と刻まれています。

石灯籠

要石歌碑

ウ　人々の活動

例大祭は，1857（安政４）年５月９日の本開館式の際に行われた祭礼を起源（「鹿島神社孔子廟行事書類」（→P116））とし，現在も５月９日に行われます。

例大祭前に，特別史跡内にある鹿島神社の氏子により，神社境内や周辺の清掃活動が行われます。

また，５月９日の直近の日曜日に氏子が中心となって組織される雷会が神輿を担ぎます。神輿は現在の城東１丁目から４丁目，東台といった旧武家町（基本的に江戸時代の旧町名で構成）をくまなく廻ります。

市街地を練り歩く様子

（神輿奥が城東児童公園）（鹿島神社提供）

渡御の前に，神社にて神輿に祭神を移す「御魂入れ（発輿祭）」が行われます。その後，自動車に神輿を移し，そのまま石灯籠や要石歌碑などを臨みながら参道を通って神社の外に出て，城東児童公園へ移動します。

午前 11 時，開催花火が打ち上げられ，神輿の巡行が始まります。旧仲の町・旧十軒町・旧東台・旧青柳町・旧荒神町を巡行します。午前は自動車で移動し，一度児童公園に戻ります。

午後 1 時，再び城東児童公園を出発します。旧赤沼町・旧仲の町・旧蓮池町・旧蔵前町・旧馬場町・旧代官町・旧三の町・旧三軒町を巡行し，旧二ノ町を目的地とします。雷会によって担ぐ区域と，自動車で移動する区域にわかれます。巡幸には地元の人々が見物に集まります。

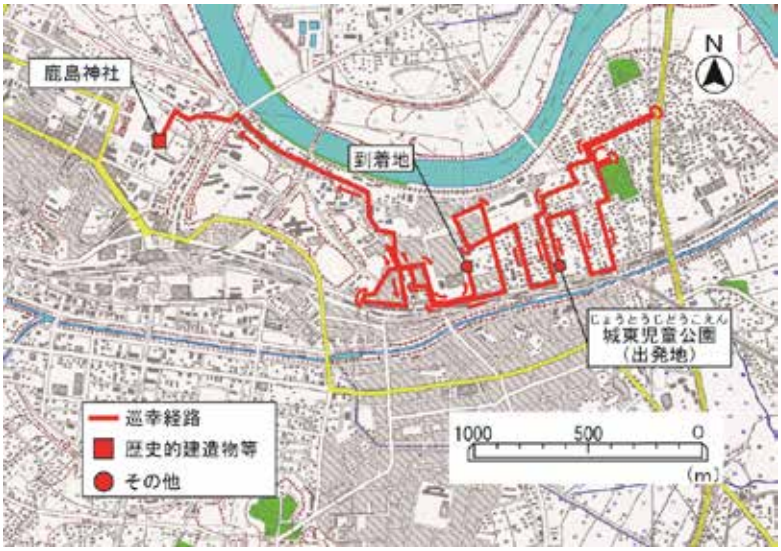
巡幸が終わると，再び自動車で鹿島神社に戻り，「御魂抜き（還幸祭）」が行われ，神社社務所で氏子の総代と雷会による直会が行われます。

城東地区の住宅。住宅前の道路も江戸時代からのもの

神輿が巡幸する下市の城東地区と呼ばれる場所は，かつて水戸藩士が居住していた武家屋敷の地域と合致しています。空襲のため古い屋敷や門・塀などのまちなみは失われたものの，生垣や板塀のある落ち着いた住宅が多く，昔ながらの町割を残しており，城下町の歴史と伝統が積み重ねられた風情あふれる地区であることを再認識させられます。

図２－21　祭礼の主な巡幸経路
（午前）

（午後）

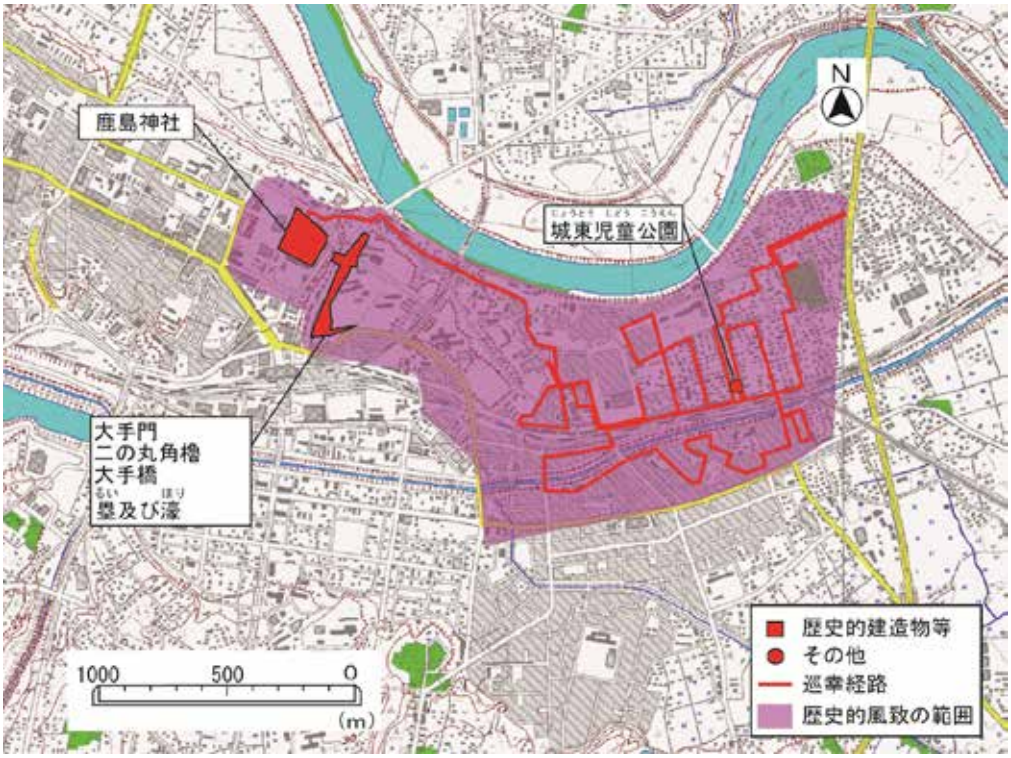


エ　まとめ

弘道館内にある鹿島神社は，1857（安政４）年５月９日，徳川斉昭が弘道館の「神儒一致」の精神から，孔子廟とともに藩校の中心区域に据えた神社です。弘道館の歴史や斉昭の理念を体現し，今に伝えています。例大祭は，1857（安政４）年５月９日の本開館式と同時に行われ，現在も毎年５月９日に執り行われており，弘道館や鹿島神社の歴史と伝統を現在に伝えています。

多くの氏子たちが住む，水戸城下の武家地であった城東地区を大神輿を練り歩く様子は，かつて武士の町であったことを再確認できる貴重な歴史的風致です。

図２－22　歴史的風致の範囲



（５）虫切りで知られる有賀神社のお磯下り

ア　はじめに

有賀神社は水戸市郊外の農村地帯である有賀町に立地します。『延喜式』神名帳にある藤内神社がその起源ともいわれる古い歴史を持ちます。

有賀神社のお磯下り

有賀神社は，古くから「虫切り」に御利益のある神社として広く知られています。赤ちゃんや子どもがぐずって泣いたり，なかなか機嫌が直らなかったりすることを「かんの虫がついた」と表現しますが，「虫切り」は，こうした子どもから「虫」を取り除くというものです。

有賀神社の秋の祭礼は，有賀神社から太平洋岸にある大洗磯前神社（大洗町）へとご神体である「大鉾」を捧持した行列が練り歩くもので，いわゆる「磯下り」と呼ばれているものです。

かつては午前３時に境内の社殿前を出発し，馬に乗って出御し，霜の降りる暗闇の中を，長い行列が法螺貝を吹きながら街道を通行し，古い商家なども残る城下町からの目抜き通りや，田園集落の古くからの街道筋を，西から東に大洗へと向かって進んでいきました。途中，行列は御仮屋に立ち寄り，多くの参拝者，特に子どもを連れた親が健康を願い虫切りの祈願に訪れました。

戦前には水郡線に臨時列車が出るほどの賑わいを見せたといいます。現在も秋の風物詩として，水戸市と大洗町の人々に親しまれています。

イ　建造物等

有賀神社

有賀神社は，859（貞観元）年，有賀地内の藤内に創建されたのが起源とされ，当時は藤内神社と称しました。1590（天正 18）年に塚原城の兵火を受けて全焼し，翌年に現在地に再建されました。江戸時代は鹿島明神と呼ばれていましたが，1873（明治６）年に青木神社を合併し，1877（明治 10）年に有賀神社と改号しました。

有賀神社拝殿

現在の本殿は流造銅板葺で，1923（大正 12）年に改築し，1976（昭和 51）年に一部修築を行いました。

境内には，1780（安永９）年の手水石（ちょうずいし）が残されています。詳細は不明ですが，駿河田中藩主本多紀伊守の家中である山田勇治と藤原好吉が奉上したと刻まれます。

手水石

ウ　人々の活動

有賀神社の磯渡御（水戸市指定無形民俗文化財）

有賀神社の秋の例祭は，かつて旧暦の９月 25 日に行われていましたが，現在では毎年 11 月 11 日に執り行われます。「大鉾（おおほこ）」を守り，有賀神社から大洗磯前神社へと移動します。この神事について，有賀神社はタケミカヅチの命を祭神とし，一方で大洗磯前神社は祭神を大己貴命（おおなむちのみこと）（大国主）としていることから，出雲国の国譲りの神話を起源にもつともされています。社伝によると，807（大同２）年に始まったとされ，1715（正徳５）年に水戸藩の学者である安積澹泊（あさかたんぱく）が記した『大洗磯前大明神本縁』では，迎える側の大洗磯前神社の記録として，「九月廿九（にじゅうく）日，有賀村の明神の祠官，矛を持し，村民数十人護来て，矛を神殿に安じ祭りを修してさる。」と記されます。

当日早朝，祭典が行われ，拝殿で宮司が祝詞を奏上します。その後，石塔や手水石の横の参道を通り，大鉾を自動車に乗せますが，境内では子どもを連れた親が大鉾に触れることができます。戦前までは馬車を用いていましたが，交通事情の変化などで，現在は大鉾を自動車に乗せて，大洗磯前神社を目指します。

祭典の様子

子どもの健康を願い，親が大鉾に触れる様子

途中，城下町時代からの目抜き通りや，田園集落の古くからの街道筋を，西から東に大洗へと向かって進んでいきます。氏子当番は用意したバスに乗車して，大鉾に従

います。氏子当番はお札を首に下げ，途中，希望者がいればお札を渡します。

行列は上市の末広町，下市の本町，そして大洗町に入って髭釜道祖神社で止まります。そこでは，地元の多くの参拝者，特に幼児を連れた親が健康を願い虫切りの祈願に訪れます。お参りに来た人にはお札が渡されます。本町では御仮屋が設けられ，大鉾が祭壇に飾られ，宮司による祝詞が奏上されます。御仮屋は本町の地元の崇敬者によって管理され，磯渡御にあわせて準備されます。停車した場所では，親が子供の服を宮司や氏子に渡し，服を大鉾にあてることで，子供の健康を願います。また，希望者の子供は名簿を神社関係者に提出します。これを「御取子」といい，後日有賀神社で子供の成長を祈願します。

御仮屋の様子

午前 11 時ころに大洗磯前神社（大洗町）に到着します。神社の石段下で大洗磯前神社の関係者が奉迎し，大鉾を大洗磯前神社の宮司へ渡します。大洗磯前神社の宮司はそのまま大鉾を拝殿に運びますが，その間，多くの人々が大鉾に触れようと集まります。

拝殿にて祭典が執行され，有賀神社からはわらづとに包んだ新米五升と，柚子，里芋等をお供えとして持参します。一方，大洗磯前神社から鯛などの魚類を贈答されるのが習わしです。

大洗磯前神社での祭礼が終わると，大鉾は再び有賀神社の宮司に戻され，有賀神社を目指します。途中，本町，末広町，赤塚駅前，水戸ドライブインで止まり，再び地元の人々のお参りを受けます。そして夜に有賀神社に戻ることになります。

大洗磯前神社に到着した様子

大鉾に多くの人々が集まる様子

現 在 の 巡 幸 経 路

行き

有賀神社（6:30 発）→　末広町広場（7:00 着 7:20 発）→

下市（8:00 着 9:00 発）→　髭釜道祖神社（9:30 着 10:00 発）→

大洗磯前神社（11:00 着）

帰り

大洗磯前神社（14:00 発）→　下市（15:30 着 16:30 発）

→末広町広場（17:00 着 17:30 発）→　赤塚駅北口（18:00 着 18:30 発）

→水戸ドライブイン（19:00 着 19:30 発）→　有賀神社（20:00 着）

図２-23　祭礼の主な巡幸経路

エ　まとめ

有賀神社は，古くから「虫切り」に御利益のある神社として広く知られています。有賀神社から大洗磯前神社へと行列が練り歩く秋の例祭，「お磯下り」においても，子どもの虫切りを願う親を中心に多くの人々が集まります。江戸時代は水戸城開かずの門を開けて通過するなど，水戸藩としても特別な行事として認識しており，明治に入っても，沿道に多くの人々が押し寄せたといいます。

現在「大鉾」は自動車で運ばれますが，巡幸経路にある御仮屋や目的地の大洗磯前神社には，今なお多くの人々が集まり，特に幼児を連れた親が健康を願って，虫きりの祈願に訪れます。

本市と大洗町の人々にとって，現在も秋の風物詩として親しまれている行事であり，自治体の枠を超えた，広域的な性格を持つ歴史的風致であるといえます。

図２－24　歴史的風致の範囲

コラム　大洗磯前神社（おおあらいいそさきじんじゃ）

大洗磯前神社拝殿

大洗磯前神社は，水戸市に隣接する大洗町に建ちます。

『文徳実録（もんとくじつろく）』によると，文徳天皇の時代の 856（斉衡３）年 12 月 29 日，常陸国鹿島郡大洗磯前に祭神である大己貴命（おおなむちのみこと）（大国主）と少彦名命（すくなひこなのみこと）が降臨した際，民に神がかり（のりうつり）して，「我は大奈母知（大国主），少比古奈命（少彦名命）なり。昔此の国を造り訖へて，去りて東海に往きけり。今民を済わんが為，亦帰り来たれり」とお告げしたことにより，社が創建されたという伝承をもちます。

857（天安元）年 10 月に，「大洗磯前薬師菩薩明神」の神号を賜りました。延喜の制では明神大社に，1885（明治 18）年４月に国幣中社に列されました。

社殿は，永禄年間（1558 年～1570 年）の戦乱によって悉（ことごと）く焼失したものの，1690（元禄３）年，水戸藩第２代藩主徳川光圀が再興を始め，1730（享保 15）年に第３代藩主綱條（つなえだ）の時に現在地に還座再興しました。社殿に施された彫刻とともに江戸初期の建築様式をよく今に伝えており，拝殿・本殿は茨城県指定有形文化財（建造物）に，また随神門（ずいじんもん）が大洗町指定有形文化財（建造物）にそれぞれ指定されています。

（６）風土記の里に伝わる「ささらばやし」

ア　はじめに

大串稲荷神社は伝承では 807（大同２）年創建とされ，水戸藩第３代藩主徳川綱條が 1707（宝永４）年に神輿及び日月鉾（市指定工芸品）を寄進したこともある由緒ある神社です。この神社に伝わる民俗芸能に，「大串のささらばやし」（国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財，茨城県指定無形民俗文化財）があります。

大串のささらばやし

かつては境内で祭りをする「居祭」と神輿が仮御殿（柳町１丁目）まで渡御する「出社祭礼」がありました。このうち，出社祭礼は 1936（昭和 11）年を最後に実施されていませんが，居祭は現在も受け継がれており，毎年 11 月 23 日に，大串稲荷神社の祭礼でささらばやしが奉納されます。

大串稲荷神社祭礼への奉納で披露されるときには，地域内外から多くの人が見物に訪れます。地域の象徴的存在といえる歴史的風致です。

イ　建造物等

大串稲荷神社

807（大同２）年の創建とされています。1681（天和元）年に光圀の命で字前谷に移され，1703（元禄 16）年に旧地に社殿を造営しました。1708（宝永５）年には本殿や前殿，幣殿，神楽殿他，馬場整備等の大建立がなされたと伝わります。本殿は神明造の芦葺で，前殿，幣殿，神楽殿があります。水戸徳川家の信仰深く，社殿は水戸城がある西側を向いて建てられたといわれています（『茨城県神社誌』，1973 年）。

大串稲荷神社拝殿

2003（平成 15）年に屋根等の修復を行いました。

2011（平成 23）年の東日本大震災にて多くの灯籠が倒壊しましたが，拝殿前の神狐の像二対（1832（天保３）年，1873（明治６年）作）が残ります。

神狐像二対

土台が低いものが 1832（天保３）年，高いものが 1873（明治６）年

ウ　人々の活動

大串のささらばやし

大串のささらばやしの祭礼奉納の起源は不詳ですが，「大串ささらの由来記」（茨城県立歴史館蔵）と題する史料の奥書には 1701（元禄 14)年の日付が見られ，大串町の大串稲荷神社の祭礼（毎年 11 月 23 日）に，氏子たちが年番を決め，無病息災・五穀豊穣を願って「ささらばやし」を奉納したのが由来ともされています。

大串のささらばやし

「棒ささら」と称される，竹棒の先に獅子頭を結びつけ，竹棒を振るって踊る形態を取ります。獅子は雄獅子（おじし），雌獅子（めじし），子獅子（こじし）の三体から成り，衣装を着けた体の前には太鼓を抱えています。演技は正面約 1.8m，側面約 2.7m，高さ約 1.8mの木の枠に幕をめぐらした底なし舞台の中で，囃方（はやしかた）の大太鼓・小太鼓・鉦・笛・唄に合わせて演じます。

屋台前方中央に子獅子，左側に雌獅子（母），右側に雄獅子（父）の三匹の親子獅子が並びます。後方の角には花模様の帯を締めた嫁姿の人形（嫁様）を飾り付けています。囃子方・歌い方も屋台内部に入ってお囃子をします。

演技内容は家族愛，親子の情愛を表現しています。迷った子獅子探しをして見つけて喜び合う物語とされています（『常澄村史』地誌編，1994 年)。

現在，大串ささらばやし保存会によって伝承保存され，毎年 11 月 23 日に大串稲荷神社の祭礼で披露されます。拝殿や神狐像が建ち並ぶ広場に屋台を設置して，子どもから大人まで幅広い年代の人々が参加します。練習は，隔週で稲荷第一市民センターなどで行われています。練習には地区の小学生も参加しており，大串のささらばやしの芸能技術は次世代へ受け継がれています。

また，毎年水戸市埋蔵文化財センターで開催される「風土記の丘ふるさとまつり」で実演されるなど，神社の外での活動も積極的に行っています。

コラム　**大野のみろくばやし**

大串稲荷神社で出社祭礼が行われていたころ，途中東前（とちゅうとうまえ）の御仮屋で大串のささらばやしと合流し，ともに水戸へ向かったのが「大野のみろくばやし」（国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財，茨城県指定無形民俗文化財）です。水戸の御仮屋につくと，ささらばやしの演技が行われたのち，大野のみろくばやしが演技を奉納しました。

水戸藩第２代藩主徳川光圀が領内巡視の折，極楽橋（ごくらくばし）の下で三体の人形を発見し，のちに下大野（しもおおの）の人の手に渡ったことが起源と伝わります。鹿島のみろく信仰や，みろく踊りが伝播（でんぱ）されたことと関りがあると指摘されます（『常澄町史』地誌編，1994 年）。

大野のみろくばやし

竹竿の先につけた三体のみろく人形を底なし舞台の中で繰り舞わせる芸能で，顔が青い人形が「鹿島さま」，赤が「香取さま」， 黄色が「春日さま」です。三体の人形は，鹿島香取神社の神庫に保管されています。

囃方の大太鼓・小太鼓・鉦（かね）・笛・唄に合わせ，みろく人形が滑稽に踊り，五穀豊穣を祈ります。その踊る様子が，子供が駄々をこねるように見えることから，「大野の駄々みろく」とも呼ばれています。

囃子とともに演技が伝承されているのは珍しいとされ（『常澄町史』地誌編），保存団体である大野みろくばやし保存会が芸能技術を受け継ぎ，地区の小学校では大野みろくばやしを練習する時間を設け，高学年の５・６年生がお囃子と演技の練習にとりくんでいます。小学校では音楽祭や運動会等でみろくばやしを発表する機会を設けています。

子供たちの練習風景

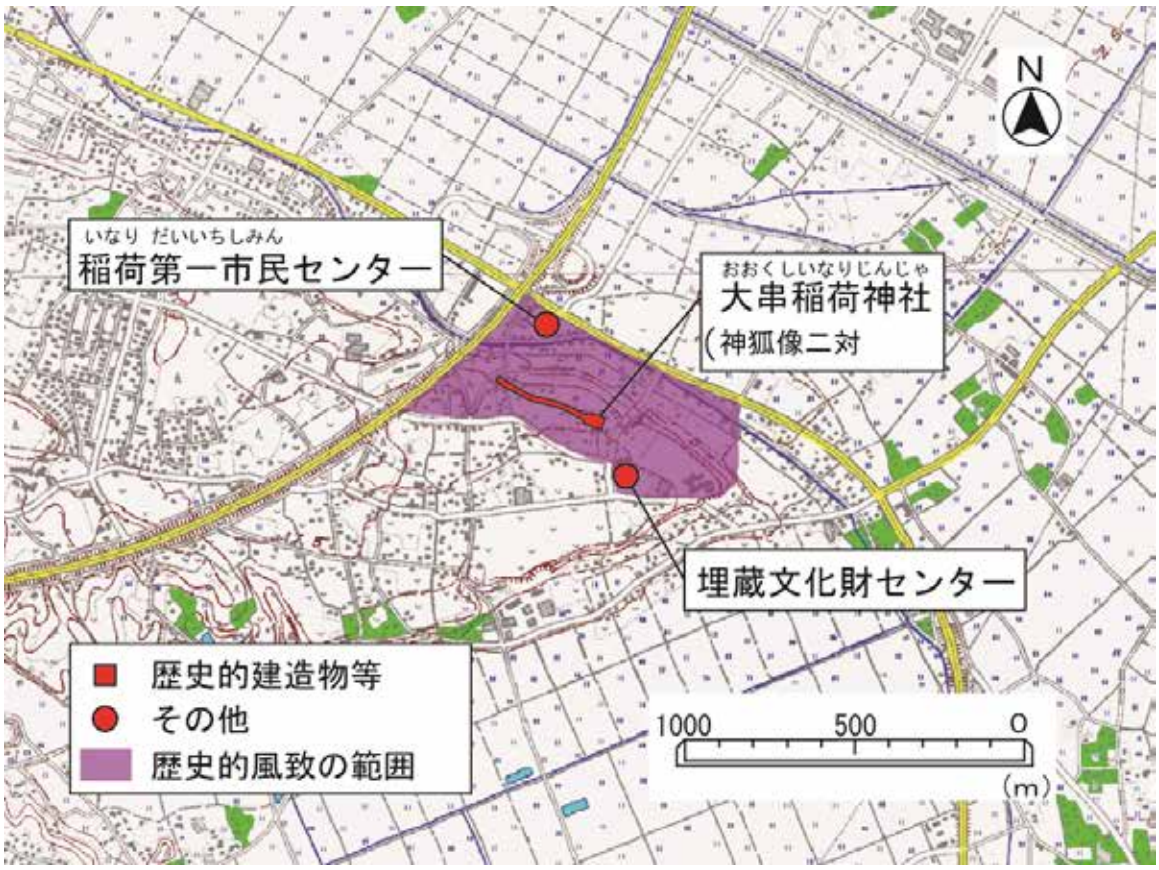
エ　まとめ

大串稲荷神社は伝承では 807（大同２）年創建とされ，「大串のささらばやし」は神社に伝わる民俗芸能として，受け継がれてきました。起源は不詳ですが，1701（元禄 14）年以前から行われていたことは確実です。その伝統は現在も受け継がれており，毎年 11 月 23 日に，大串稲荷神社の祭礼に奉納されています。

かつて大串のささらばやしは神社を出て，水戸城下まで舞を行っていました。現在は居祭として神社のなかで行われますが，演技が次世代へと継承されつつある貴重な民俗芸能です。

太古よりの森に囲まれた神社の前で舞が奉納され，その周りに多くの人々が集い，周辺に広がる水田地帯に笛や太鼓の音が響き渡る風景は，郷土の歴史と伝統を感じることができる大切な歴史的風致といえます。

図２－25　歴史的風致の範囲



まとめ

本市に伝わる主だった祭りは，かつての城下や村落で行われていた違いはありますが，いずれも水戸藩や水戸城下と非常にゆかりの深いのが特徴で，本市がかつて水戸藩の中心地であったことを感じることができます。時代の移り変わりとともに，祭りの姿は少しずつ姿を変え，自動車で神輿を移動させる祭りが増え，神輿が神社から外に出ない祭りもあります。しかし，今なお，本市や郷土を代表する行事として多くの人々に愛され，次世代に受け継がれています。

それぞれの祭りは季節ごとに行われます。八幡宮や東照宮，そして鹿島神社の例大祭は春に行われ，人々に暖かい季節の到来を感じさせます。水戸黄門まつりは真夏の８月に催され，市民や，本市出身者で夏休みを利用して帰省した人々，または観光で訪れる人々にとって，夏の一大イベントとして定着しています。

吉田神社の秋季祭礼は暑さが落ちついた 10 月に行われます。有賀神社のお磯下りや大串ささらばやしは，冬の足音を感じさせる晩秋の 11 月に催されます。こうして，祭りごとに，人々は季節の移ろいを感じることができます。

本市の歴史，文化を語るうえで欠かせない行事として受け継がれ，八幡宮や薬王院といった貴重な歴史的建造物とあいまって，本市にかかせない貴重な歴史的風致となっています。

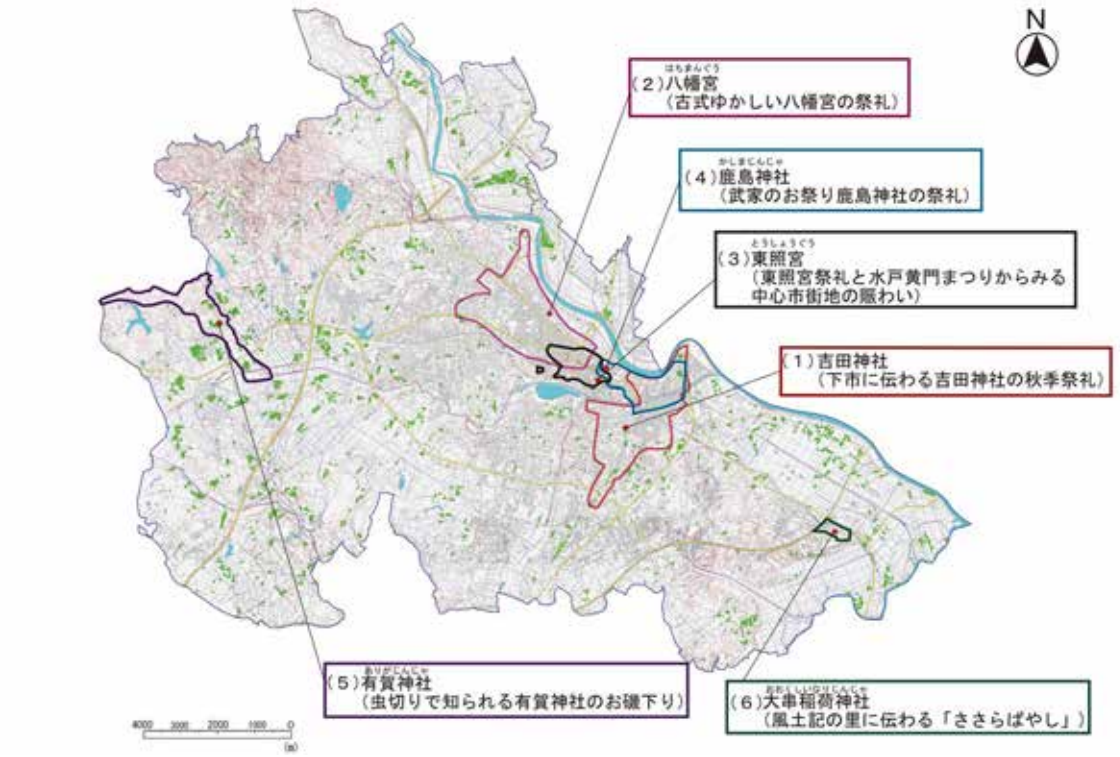



図２－26　歴史的風致の範囲